

新発田御道具帳にみる溝口家旧蔵の茶道具

宮 武 慶 之

新潟下越にある新発田は、かつて溝口家が支配した。溝口家四代藩主・重雄以降の藩主は茶の湯に関心をもった。そのため溝口家は多くの茶道具を所有した。たとえば中興名物茶入「蛭」（畠山記念館蔵）や古瀬戸茶入「溝口胴高」（個人蔵）がある。しかし、これまでのところ溝口家が所有した茶道具の全体像は明らかにされていない。近年、溝口家の道具帳の存在が明らかとなった。これらは記載される内容から溝口家の蔵帳である。今回、道具帳の一つである『新発田御道具帳』に記載される茶道具に注目した。これらのうち現存または文献上において確認できる作品も存在する。本稿では蔵帳の出現からその周縁について論じるものである。

はじめに

新発田藩主溝口家は茶の湯を嗜み、中興名物茶入「蛭」（畠山記念館蔵）や古瀬戸茶入「溝口胴高」（個人蔵）を所蔵したことも有名である。

溝口家の所蔵した道具に関する蔵帳として『新発田御道具帳』、『江戸御道具帳』、『七間之御土蔵御道具帳』（いずれも新発田市立図書館蔵）がある。⁽¹⁾ 三つの蔵帳はこれまで研究がなされておらず新出の史料として注目できる。本稿では『新発田御道具帳』（図1）に注目する。『新発田御道具帳』は後述するように幕末に成立したと考えられ、当時の溝口家が所蔵した茶道具を網羅しているといっても過言ではない。『新発田御

道具帳』を研究することは、溝口家の所蔵した茶道具を明らかにすることができると考える。

これまでの筆者による研究では、『文化情報学』（第九巻第二号、二〇一三年）において溝口家が所蔵した大燈国師墨蹟二件の周縁について論じた。⁽²⁾ また、『新潟県文人研究』（一六号、二〇一三年）において溝口家が所蔵した掛物の蔵帳である『御掛物帳』に所載の書画中、記載と合致する現存または売立目録所載の図版から墨蹟や近世絵画の周縁を論じた。⁽³⁾ そこで本稿では『新発田御道具帳』に所蔵される茶道具に注目する。同帳に所載され、現存または文献等から合致する作品を紹介する。なお、別項において『新発田御道具帳』の翻刻を付す。

一 『新発田御道具帳』について

新発田市立図書館には溝口家の所有した道具類が記載された道具帳が存在する。『新発田御道具帳』、『江戸御道具帳』、『七間之御土蔵御道具帳』、『御掛物帳』（いずれも新発田市立図書館所蔵）である。

今回、注目したのは『新発田御道具帳』（図1）である。近年に至るまで本書の存在は『溝口伊織家古文書』⁽⁴⁾に紹介されるも、今日まで調査がなされることはなく、内容を知ることができなかった。二〇一三年に発刊された『溝口家書目集成』⁽⁶⁾（全四巻）にも未所収である。また、科学研究費による研究として、新潟大学原直史教授を中心としたグループによる研究がある。原氏らは『御道具控』、『御道具類目録』、『蓄蔵物品目次』道具帳三件の翻刻を行い研究報告書が出されている。⁽⁶⁾しかしながら、先に述べた『新発田御道具帳』をはじめとする四件の蔵帳については未所収である。



図1 『新発田御道具帳』
（新発田市立図書館蔵、撮影筆者）

溝口家は四代藩主・重雄（一六三三―一七〇八）が怡溪宗悦（一六四四―一七二四）に茶を学び、十代藩主・直諒（一七九九―一八五八）も石州流の茶の湯を嗜んだことから、茶の湯文化史上では重要な家柄である。そのため同家は多くの茶道具を所蔵した。溝口家は明治期に売立を行った

ているが、その目録の存在は不明であった。そのため同家の所蔵した茶道具の全貌をすることはできなかった。今回、蔵帳の発見により所蔵した道具中、茶道具の全貌を明らかにできるものと考ええる。

大名家における蔵帳では小堀遠州の所持した道具帳である遠州蔵帳、松平不昧による雲州蔵帳などがある。溝口家の蔵帳が存在することは、小堀家とも関係し、石州流の茶の湯を嗜んだ大名家の所蔵品を明らかにする点で貴重である。

本稿ではこの『新発田御道具帳』に注目する。『新発田御道具帳』の表題は新発田御道具帳。本紙料紙の寸法は縦二四^サ、横一七^サ、形態は和本。墨書によって書かれる。『新発田御道具帳』ほか三件の蔵帳（いずれも新発田市立図書館蔵）は溝口家の家老であった溝口伊織家旧蔵である。これらの蔵帳は記載される内容から藩主家の蔵帳である。家老の伊織家にどのような経緯で伝わったかは不明である。ただ、これらの蔵帳が写本であることを考えると藩主家控えの性格であると推測される。

ところで、『新発田御道具帳』にある藩主では、十代藩主・直諒は見廟と記される。これは直諒の法名が見龍院殿であることによる。十一代藩主・直溥（一八一九―一八七四）は名前で書かれる。このことから本書の成立時期は直諒没後かつ直溥存命中、すなわち一八五八年以降一八七四年以内と考えられる。無論、その前後にも道具の出入りはあったものと考えられるが、蔵帳が整理された時期は幕末から明治期にかけてと推定される。

記載される内容をみると、茶碗、茶入、茶杓、棗、茶巾盥、水指、建水、釜、炭斗、水次、灰器、茶箱の順に記載される。

二 『新発田御道具帳』所載の道具

ここでは先ず、大正時代に高橋箒庵（一八六一―一九三七）により編纂された主要な茶入および茶碗の集大成である『大正名器鑑』⁽⁷⁾に所載される器物中、溝口家旧蔵品を紹介する。そのうち、現存が確認できた「宗節伯庵」（泉屋博古館分館）、「溝口胴高」（個人蔵）を紹介し「溝口胴高」についてはその添状から周縁を論じたい。次に現存する作品中、蔵帳と合致する道具を紹介する。高橋箒庵は当時、溝口家から直接道具を購入し茶会などで用いた。そこで箒庵の所蔵品を売立した際に作成された売立目録に注目し、溝口家の蔵帳と合致する作品を紹介する。茶杓については十代藩主・溝口直諒により当時、溝口家が所蔵した茶杓を原寸大で書写した和本『茶杓図譜』が存在する。図譜と蔵帳に所載の茶杓中、合致するものを紹介する。

i 文献上での溝口家旧蔵品

高橋箒庵による『大正名器鑑』では、溝口家旧蔵品として以下の茶入および茶碗が所載する。⁽⁸⁾

- ・瀬戸茶入「溝口胴高」
- ・薩摩甫十茶入「玉水」
- ・古瀬戸茶入「蛸」
- ・古瀬戸茶入「徳永肩衝」
- ・丹波焼茶入「紅葉」
- ・織部沓茶碗
- ・宗節伯庵茶碗

これらの記述と『新発田御道具帳』とは以下のように合致する。

- ・古瀬戸茶入「溝口胴高」は「寶上乾坤入 胴高茶入」（「御茶入之部」）
- ・古瀬戸茶入「蛸」は「寶上乾坤入 蛸茶入」（「御茶入之部」）
- ・古瀬戸茶入「大瀬戸」（別称、徳永肩衝）は「寶上乾坤入 大瀬戸茶入 宗中極書入」（「御茶入之部」）

- ・丹波焼茶入「紅葉山」は「御鼻肩入 丹波焼茶入銘紅葉 箱書縣宗知」（「御茶入之部」）

- ・織部沓茶碗は「御鼻肩入 織部沓茶碗 箱書御宛名」（「御茶碗之部」）
- ・宗節伯庵茶碗は「乾坤入 宗節茶碗」（「御茶碗之部」）

ここで『大正名器鑑』所載の溝口家旧蔵の茶入、茶碗（順に「蛸」、「徳永肩衝」、「紅葉」、織部沓茶碗、宗節伯庵茶碗）について紹介しておきたい。

・「蛸」（図2）

中興名物茶入「蛸」（畠山記念館所蔵）である。『大正名器鑑』によると箱甲の左肩上に「蛸」と小堀遠州（一五七九―一六四七）により墨書で書かれる。茶入に付属する小堀宗中（一七八六―一八六七）の添状によれば、この茶入は弘化四年（一八四七年）、当時江戸在住の溝口直諒により行われた小堀遠州二〇〇年回忌茶会で使用された。客に宗中などを招き、席中でこの茶入が用いられた。このとき宗中により詠まれた歌が

たくひなきめくみもみちのひかりをもここにあつめて見るほたるかな

である。なお、この添状は『御掛物帳』には「蛸茶入添掛物自詠和哥」として所載される。⁽⁹⁾

・「徳永肩衝」（図3）

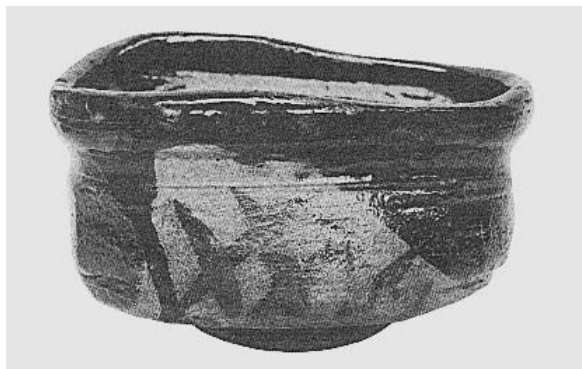


図5 織部沓茶碗（個人蔵）
（『大正名器鑑』所載）

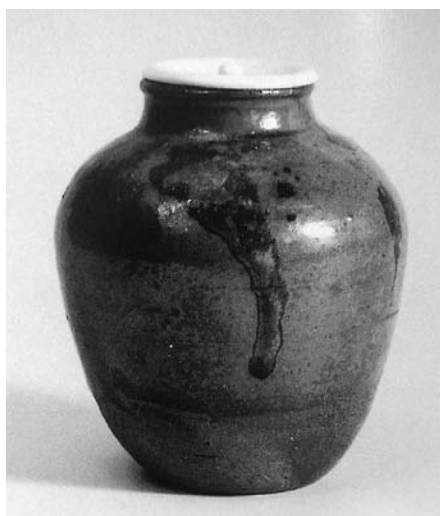


図2 古瀬戸茶入「蛸」（畠山記念館蔵）
（『茶道聚錦』より転載）

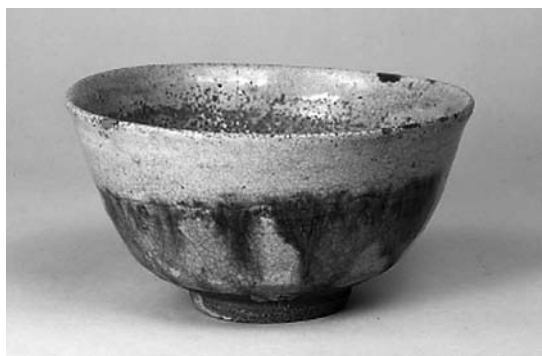


図6 宗節伯庵
（泉屋博古館分館蔵）

胎土は疵土、正面には海鼠釉があり伯庵茶碗の要件を満たす。実際に拝見すると釉葉全体は青く、一部に枇杷色がみられる。
（画像協力および提供は同館）

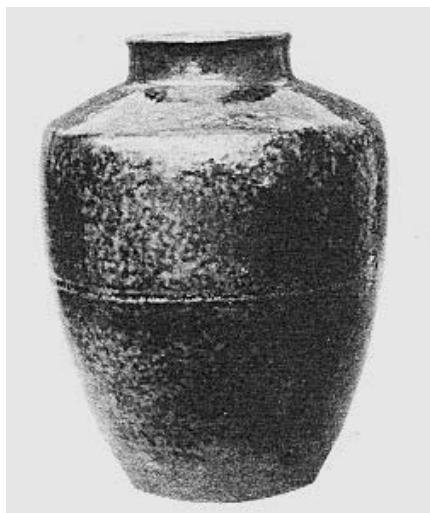


図3 瀬戸茶入「大瀬戸茶入」（別称、徳永肩衝）
（『大正名器鑑』所載）

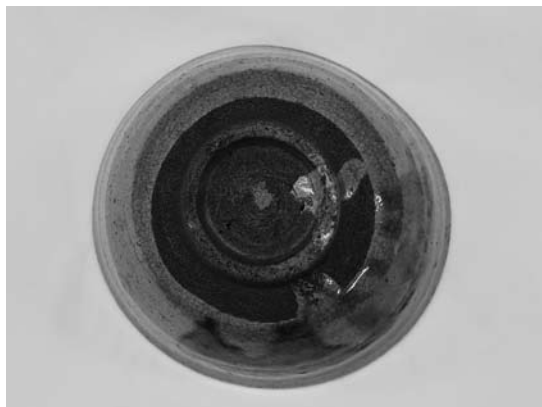


図7 宗節伯庵茶碗の高台。
釉葉が高台に飛んだ箇所と海鼠釉が一条垂れた箇所をみることができる。
（撮影筆者）



図4 丹波焼茶入「紅葉」
（『大正名器鑑』所載）

「大瀬戸茶入」は古瀬戸茶入「徳永肩衝」のことである。『大正名器鑑』中の小堀宗中による添状では以下のような記述がある。

大瀬戸ト御下札之御茶入、三冊名物記ニ出候處之徳永之御茶入ニ相違無之候、為後證染愚筆云々

銘の由来となった徳永とは、美濃高須藩初代藩主・徳永寿昌（一五四九―一六一二）が所持したことに因むとされる。

・「紅葉」（図4）

丹波焼の茶入である。箱甲の墨書は、縣宗知の筆跡により「紅葉」、裏には

嵐吹く大江の山の紅葉はハ生野にをれるにしきなるらむ

とある。この歌は『後拾遺和歌集』所載の俊盛法師による。『大正名器鑑』の著者である高橋箒庵自身が、溝口家の古老（旧臣か）に聞いた話として、以下のような記述がある。

（中略）

見龍院様は殊の外此茶入を愛師し給ひ、中興名物蚩よりも猶ほ大切に之を秘蔵せられた

（中略）

文中の見龍院とは十代藩主・直諒の法号であり、この茶入が直諒愛蔵品であったことがわかる。『大正名器鑑』編纂時の所有者は筆者の高橋箒庵である。

・織部沓茶碗（個人蔵、図5）

織部焼の沓茶碗である、この茶碗を収納する箱の甲に「溝口伯州様古田織部」とあり、古田織部（一五四四―一六一五）の筆跡とされる。そのためか蔵帳では「御宛名」（＝「溝口伯州」として記載される。『大

正名器鑑』において高橋は、「其茶友であつた溝口伯耆守に贈りたる者なり」と紹介される。なお溝口伯耆守に該当するのは溝口秀勝（一五四八―一六一〇）である。

・宗節伯庵茶碗（泉屋博古館分館蔵、図6）

この茶碗については森下愛子氏（泉屋博古館分館学芸員）の立ち会いのもと熟覧した。茶碗は山疵にさらされた胎土に瀬戸の釉薬が施される。茶碗正面には海鼠釉が掛かっており、高台には釉薬が飛んだ箇所が一つ、海鼠釉が一条垂れた箇所の二カ所がみられる（図7）。伯庵手茶碗は総体に枇杷肌が約束とされるが、宗節伯庵については熟覧したところ正面は青みがかり、背面が薄い枇杷色、高台脇の削られた周辺の釉に最も枇杷色をみることができるとある。見込みも総体に青みがかった釉である。口作り周辺には茶渋があり、底はきれいであることから、溝口家および高橋家、住友家において抹茶茶碗としての使用によるものである。なお、『大正名器鑑』には箱書付についての記述があり、住友家の茶会記録にも

瀬戸伯庵 箱石州侯

と記載される。¹⁰ 付属品を熟覧したところ、茶碗を収納する箱および外箱は近代になって作られたものと考えられ、片桐石州による箱書付などは確認できなかった。

以上から『大正名器鑑』の図版から、「溝口胴高」、「蚩」、「徳永肩衝」、「紅葉」、織部沓茶碗、宗節伯庵茶碗は溝口家伝来である。

今回の調査から「溝口胴高」（個人蔵）および付属する添状の現存を確認した。ここでは先ず、「溝口胴高」の周縁について論じたい。

①「溝口胴高」とその付属品

古瀬戸茶入「溝口胴高」は『新発田御道具帳』において

寶上乾坤入

一 胴高茶入

(「御茶入之部」)

と記載される。この茶入は古瀬戸茶入「溝口胴高」(個人蔵、図8)である。この茶入は『遠州蔵帳元帳』に所載され、小堀遠州が所持した。⁽¹¹⁾なお、画像(図8)は『遠州蔵帳元帳』での所載に従いなだれ部分を正面にして撮影した。このほかの名物記において、『茶入之次第』、『茶入之記』、『三冊名物記』に所載される。⁽¹²⁾この茶入はこれまで存在が不明であったが今回の調査により確認できた。

熟覧したところ、この茶入の釉薬はやや渋みと青味を帯びており、その様子は古瀬戸茶入「春山蛙声」(湯木美術館蔵)ほどの明るさはないものの共通している。胴部には六本の篋目があり、きりりとした肩と立ち上がりをもせる口元である。形状から当時、日本にもたらされた唐物茶入を模したものと推測される。土見せから土の具合も確認できる。⁽¹³⁾茶入の畳付きに糸目はない。茶入の窯分分類中、胴高は唯一本作をみるのみで、この茶入が本歌である。胴高の名称は茶入中央の胴部分から更に一段と高くなっている形状から名付けられたのであろう。

現在、この茶入の付属品には小堀遠州筆「茶入之次第」、縣宗知筆「証文」、縣宗知筆「質流状」、小堀宗中添状、緒、益田鈍翁筆「入日記」、このほか替袋二ツ(挽家に収納する袋は柿地菱紋緞子、替に茶地雲紋緞子、白地妙心寺金欄)、替蓋二ツがある。

縣宗知による「質流状」(図9)では茶入「胴高肩衝」、茶入「蛭」、



図8 「溝口胴高」(個人蔵)
(撮影筆者)

茶入「大概」、「唐僧両筆 閑極法雲 東澗道洵 江月和尚外題有」、「青磁四方香炉 利休書付」を宗知から溝口家に譲渡する内容で、以下のよう

な記述がある。

右五色之道具、小堀和泉守殿々去々年酉極月朔日ニ質物ニ取金子御用立候処、金子御返弁難被成候二付、道具五色共二拙者へ御流し被下候、就者右之道具共此度信州様江代金五百両二売上申候代金不殘請取相済申候、則和泉守殿御家来衆々被下候借用手形并道具流シ手形両通共二其許江進置申候

差出人は江戸幕府御庭方の懸宗知(一六五六―一七二二)、宛名には高久助之進の名がある。縣宗知と溝口家の交渉は清水園(新発田市内)の作庭に関係したことがある。宛名にある高久助之進は新発田藩四代藩主・溝口重雄の御仕置役にその名がある。⁽¹⁴⁾文中の信州様とは新発田藩四代主・溝口重雄のことである。⁽¹⁵⁾

文面から、縣宗知が三つの茶入(「胴高」、「蛭」、「大槪」)、「閑極法雲・東澗道洵両筆墨蹟」、「青磁四方香炉」を質にとつて小堀家に金子を貸し付けた。しかし小堀家では返済の目処が立たず、預けた道具を縣に渡すこととした。縣は金子に換えるため預かった道具を溝口家に売却したとある。元禄七年から八年の小堀家では政恒(一六四九―一六九四)が没

し、政房（一六八五―一七一三）が跡目相続した。添状にある日付からも跡目相続のために多額の金子を必要としたと考えられる。なお詳細については『アート・リサーチ』第一四号を参照されたい。⁽¹⁶⁾

次に、縣宗知「証文」（図10）がある。この書状の宛名も高久助之進と君宇左衛門であり、重雄の側近に与えた書状であることがわかる。証文の記述は以下である。

今朝は緩々得御意大慶に奉存候然は御金泉守殿へ持参仕、家来衆へ相渡し手形請取候、て只今もたせ進候家来共機嫌忝なかり大慶の躰申斗無御座候右之手形私持参可申儀に御座候へども時分柄と申、今朝御意まかせ御文箱に入、今朝封之印をして進し申候、心事来春可得御意候以上

内容は、溝口家から金子を預かり、小堀家から手形を受け取った内容である。熟覧したところ見返し部分の日付は本文にある宗知の筆跡とは考えにくく異筆である。また、溝口胴高茶入に付属すること考えあわせても、元禄五年（一六九二年）とは考えにくい。この書状が書かれたのは元禄八年（一六九五年）であると推測される。

次に小堀宗中による添状（図11）では、この茶入の作者が藤四郎であると述べられるが、今後検討を要するであろう。

②「玉水」茶入の添状

薩摩甫十茶入「玉水」（個人蔵、図12）は『大正名器鑑』において新発田藩溝口家の旧蔵品として紹介される。先述の縣宗知「証文」（図13）も同茶入の添状として記載されている。しかしながら、現在の所蔵家では添状は付属していなかった。また、先の「溝口胴高」においても紹介し

たように宗知添状は「溝口胴高」に付属する証文であることが判明した。以上のことから「玉水」茶入が溝口家伝来とされるのは『大正名器鑑』編纂時の誤記載である。

縣宗知「証文」（図10）は「胴高茶入」の添状である。これらの点を考慮すると、この「証文」は、宗知が溝口家より五種の道具代金を預かり小堀家に金子を渡したのちの事後報告を兼ねた消息であると考えられる。以上の点からも薩摩甫十茶入「玉水」が溝口家の伝来品であるとはいえない。つまり『大正名器鑑』において溝口家の所蔵品は「溝口胴高」、「蛭」、「徳永肩衝」、「紅葉」、織部沓茶碗、宗節伯庵茶碗である。

ii 現存が確認される道具

①井戸茶碗（個人蔵、図13）

総体に薄作りで、轆轤目がある。見込みは杉形をしており、内側へ行くに従い尖っている。茶碗の口周辺にも釉薬が掛かっており、一条のなだけが見所となっている。高台付近にも梅花皮がみられ、高台には茶碗を形成する過程で施された削り跡がある。収納する箱は遠州系の箱作りで、側面に溝口家の収蔵品を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印がある。

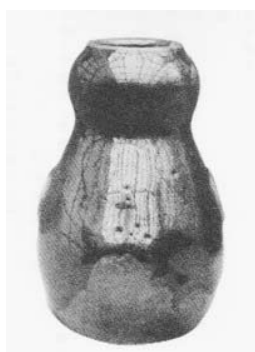


図12 薩摩甫十茶入「玉水」（個人蔵）
（『大正名器鑑』より転載）

なお甲部分に「翠浪」の墨書があり、神尾備前守とされる。茶碗には仕服（紺地に蝶の金襴）が付属する。⁽¹⁷⁾なお、『新発田御道具帳』では、「御茶碗之部」に所載の「井戸手茶碗」、「井戸茶碗」、「井戸時

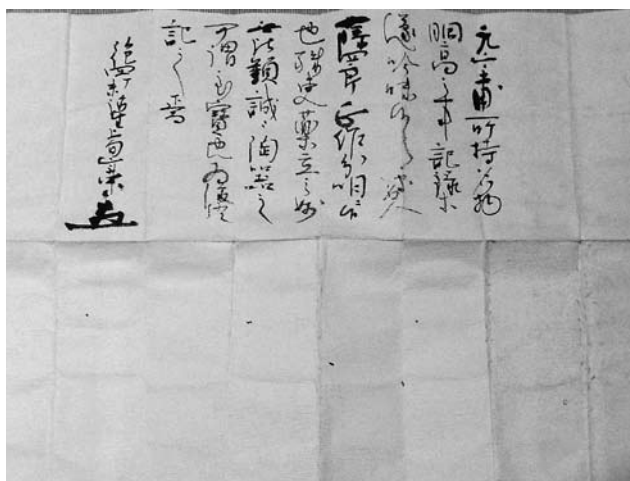


図 11 小堀宗中添状

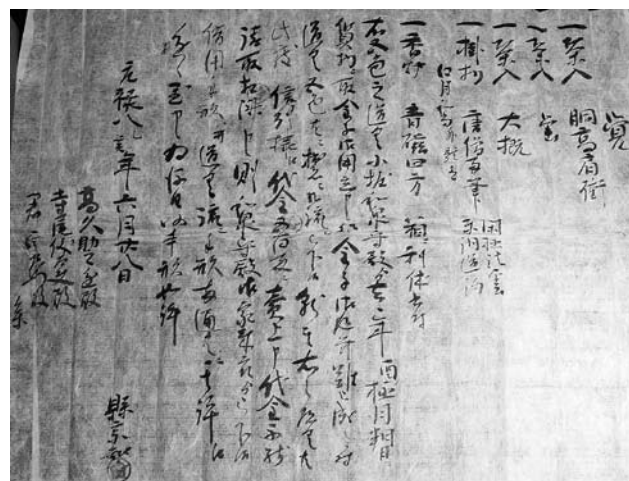


図 9 懸宗知添状
(以下図 10、図 11 はすべて個人蔵。撮影筆者)

一 螢 覚
 一 洞高
 一 大概 開帳法雲
 一 唐僧尚筆 東潤道海
 一 江月和尚外題有 箱ニ利休書付
 一 青磁四方香炉 箱ニ利休書付
 右五色之道具小堀和泉守殿へ去々年西極月朔日
 質物ニ取金子御用立申候処金子御返弁難被成候ニ付
 道具五色共ニ拙者へ御流し被下候就者右之道具共
 此度信州様江代金印五百両ニ売上申候代金不殘
 請取相済申候則和泉守殿御家来衆へ被下候
 借用手形并道具流シ手形両通共ニ其許江
 進置申候、為後日仍手形如件
 元禄八年乙亥六月廿八日 縣 宗知印
 高久助之進殿
 寺尾義太夫殿
 君宇左衛門殿 参

元宗甫所持名物
 洞高之事記録本
 遂吟味候處名人
 藤四郎正作分明二候
 也殊更葉立之妙
 無此類誠ニ陶器之
 可謂と寶也為後證
 記之焉
 弘化四丁 弥生上旬 宗中(花押)

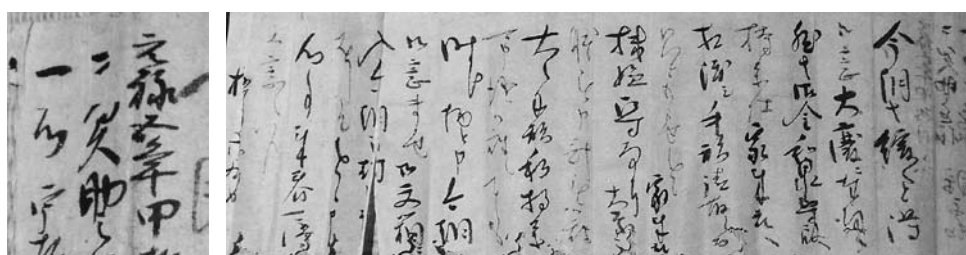


図 10 懸宗知証文(上)および証文の見返し部分(左)

(見返)
 (異筆)
 元禄五年申拾二月手紙
 高久助之進様
 縣宗知
 君宇左衛門様
 今朝は緩々得
 御意大慶に奉存候
 然は御金泉守殿へ
 持参仕家来衆へ
 相渡し手形請取候
 て只今もたせ進候家来共
 機嫌忝なかり大慶の
 鉢申斗無御座候
 右之手形私持参
 可申儀に御座候へども
 時分柄と申今朝
 御意まかせ御文箱に
 入今朝封之印
 をして進し申候
 心事来春可得
 御意候以上
 極月二十九日

代茶碗」、「井戸脇平茶碗」のいずれかに該当する。

②瀬戸建水（個人蔵、図14）

瀬戸の建水である。当初から建水を意図して制作されたのであろう。釉薬は飴色で瀬戸釉が全体および内側にも掛けられ、畳付き部分は無釉である。箱の甲墨書には「藤四郎 建水」（筆者不明）とある。箱側面に「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印がある。なお、建水を包む裂には「瀬戸翻」とあり、『新発田御道具帳』の「瀬戸翻」（建水之部）に合致すると考えられる。

③伊賀菱形水指（個人蔵、図15）

伊賀の菱形水指である。この水指を収納する箱の貼紙には

溝口家伝来翠^(壽)塘庵所蔵名物古伊賀菱形水指

とあることから、溝口翠濤が所蔵した同家伝来の水指であると考えられる。水指正面の左上部から右下部にかけて全面ビードロ釉がかかり、それ以外の部分は飴色を呈する。水指全体の形状は箱書では菱形とされるが木瓜形のように角がとれた菱形である。制作年代は釉薬の状態から江戸時代初期の伊賀焼と推定され、遠州の指導による遠州伊賀の影響を受けた作例であると考えられる。当初から水指を意図して制作されたと考えられ、伊賀焼水指の中で、このような形状の作例はみられない。水指裏の畳付きは素地がみられ長石も含まれている。平底は真つ平で伊賀焼の通例通りである。なお収納する箱には溝口家の所蔵を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印はないものの、貼紙によって溝口家の旧蔵品であることがわかる。おそらく現在の箱は外箱で、水指本体を収納する箱があったものと推測される。『新発田御道具帳』では、「古伊賀水指」または「伊賀いちし蓋水指」

（いずれも「御水指之部」）のいずれかに合致すると考えられる。

④唐物竹皮入長角炭斗（福岡東洋陶磁美術館蔵、図16）

茶席の炉または風炉中に炭をつぐ時に用いる唐物の炭斗である。竹皮を用いて作られ箍に藤が組まれている。収納する箱側面に「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印がある。蔵帳中、「唐物炭斗」、「唐物平炭斗」、「唐籠組炭斗」などに該当する。

iii 高橋箒庵所有の道具

溝口家は明治三十七年（一九〇四年）に家財の売立を行っており、そのとき茶道具も散逸したと考えられる。⁽¹⁸⁾しかしながら、今日まで出品目録である売立目録は発見できていない。⁽¹⁹⁾その後の溝口家には残された物品も多くあったようである。というのも明治四三年（一九一〇年）に高橋箒庵が、溝口家から同家所蔵の茶器等を購入したことがわかっている。⁽²⁰⁾たとえば先に紹介した丹波茶入「紅葉」が該当する。

高橋箒庵による所蔵品の売立が明治四五年（一九一二年）に京都美術倶楽部（『東都寸松庵主所蔵品』⁽²¹⁾、大正七年（一九一八年）には東京美術倶楽部（『高橋家御蔵品入札』⁽²²⁾）において行われている。これらのほかに二回の売立がある。以上四回の目録のうち溝口家伝来とする作品をみてみると先の二回の売立において所載が確認できた。ここでは先に述べた二回の売立から蔵帳と合致する作品を提示してみたい。

①『東都寸松庵主所蔵品』

同売立目録をみてみると多くの溝口家伝来とする作品が所載される。



図 14 瀬戸翻（個人蔵）
（撮影筆者）

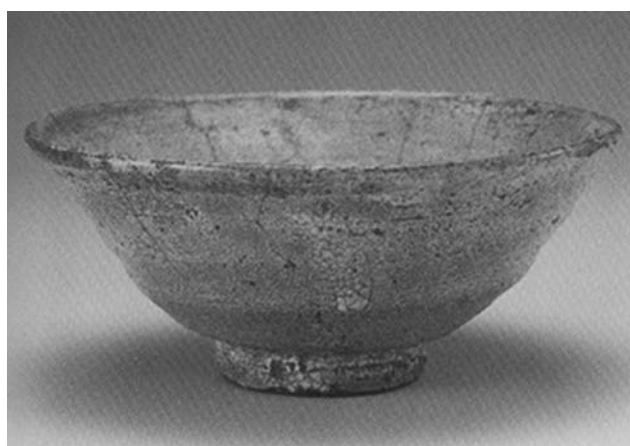


図 13 井戸茶碗（個人蔵）
（『大美特別展（第二回）』より転載）

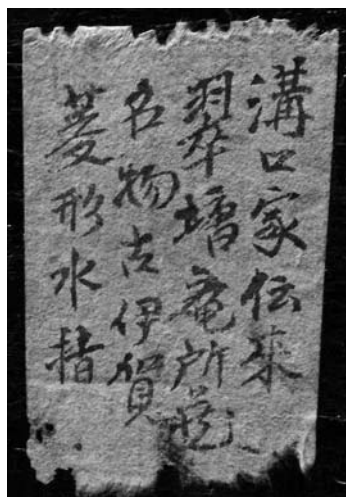


図 15 伊賀菱形水指（個人蔵、上）
収納する箱の貼札（左）
（撮影筆者）



図 16 唐物竹皮入長角炭斗（福岡東洋陶磁美術館蔵、右）、底（左）
（画像提供、同館）

売立目録に図版掲載はないものの、以下の器物が『新発田御道具帳』と合致する。

・「破風窯茶入 銘亀甲 溝口家旧蔵 袋焼切」は「亀甲茶入 箱書 宗中」(「御茶入之部」)

・「朝鮮菱形水指 宗中箱書付 溝口家旧蔵」は「朝鮮菱形水器 箱書 宗中」(「御水指之部」)

である。

②『高橋家御蔵品入札』

目録所載の道具中、『新発田御道具帳』と合致するものは以下がある。

・「菊屋大海 溝口家旧蔵」(図17)は「菊屋大海茶入」(「御茶入之部」)

・「染付茶碗 銘腰あられ 白酔庵箱 溝口家旧蔵」(図18)は「染付腰霰茶碗」(「御茶入之部」)

・「蕎麦茶碗 銘むさしの 溝口家旧蔵」(図19)は「御秘蔵 そは茶碗 銘武蔵野」(「御茶碗之部」)

・「清巖自造茶碗 溝口家旧蔵」(図20)は「御秘蔵 清巖手造茶碗」(「御茶碗之部」)

となる。なお、同目録での図版所載はないものの「唐象牙棗 溝口家旧蔵」は、「唐物象牙茶器 (「御茶器之部」)」が合致する。

iv ほか売立目録に所載される溝口家旧蔵の茶道具

昭和七年六月、東京美術倶楽部において開催された売立の目録である『説田家蔵品展観目録』⁽²³⁾に「祥瑞鳥摘福寿字茶入 溝口家伝来」(図20)が所載される。鳥の摘みの祥瑞である。この茶入は「御蟲肩入 祥瑞福

寿紋薄茶入」(「御茶入之部」)と合致する。

このほか昭和一四年二月、東京美術倶楽部において開催された展観目録である『特別展観目録』⁽²⁴⁾には、図版掲載はないものの「瀬戸洪紙手一重口水指 溝口家伝来」が記載される。この水指は「御秘蔵二十式ばん洪紙手水指」または「瀬戸一重口水指」(いずれも「御水指之部」)のいずれかに合致すると考えられる。

v 茶杓について

現在、東京大学史料編纂所には『茶杓図譜』(上下二巻)が所蔵され⁽²⁵⁾る。本書は溝口家において所蔵された茶杓を写した図録である。表題の「茶杓図譜」の四字は小堀宗中、画は狩野派の絵師であった林勝鱗(一八三一―一八八八)、筒書付などの書写は溝口直諒によるものである。勝鱗は名を雅章。木挽町狩野勝川院雅信に学んだ新発田藩の御用絵師であった。また、茶杓に関しては『十二月茶杓』もある。⁽²⁶⁾本書は小堀宗本(一八一三―一八六四)、弟である小堀蓬露(一八一六―一八七六)の兄弟合作による十二月茶杓、父である小堀宗中の閏月茶杓、合計一三本の茶杓および筒書を写したもので画は勝鱗、筒などの墨書の写しは直諒によるものである。これらはその存在がこれまで知られるも紹介されずにいたため新たな資料として注目できる。

所載される茶杓の中で現存するものは一件確認できた。小堀遠州による茶杓「式部卿様まいる」(北村美術館蔵)である。

今回の調査では木下收氏(北村美術館館長)の立ち会いのもと茶杓「式部卿様まいる」(同館蔵)を熟覧することができた。総体は一七・六センチ。節上は白竹、節下以下は茶色く景色がある。用いた竹は染み竹である。朽ち



図 18 染付腰霰茶碗
箱書きは白酔庵・芳村観阿と紹介される。
（『高橋家御蔵品入札』所載）



図 17 菊屋大海茶入
（『高橋家御蔵品入札』所載）

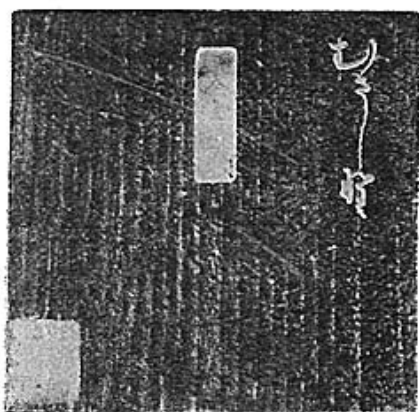


図 19 蕎麦茶碗銘「武蔵野」
右、茶碗。左、収納する箱
箱左下には「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印が貼られている。
（『高橋家御蔵品入札』所載）



図 21 祥瑞福寿紋薄茶入
（『説田家蔵品展覧目録』所載）

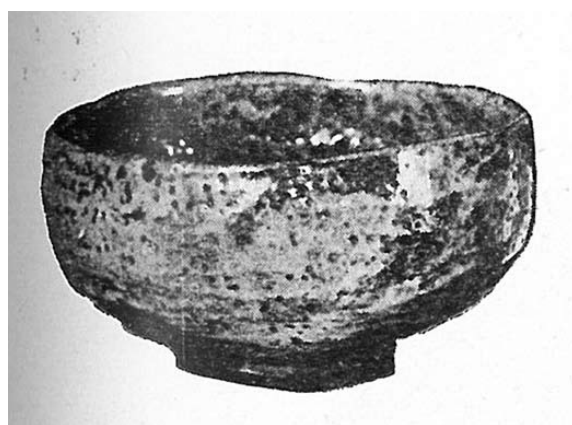


図 20 清巖手造茶碗
清巖宗渭（大徳寺一七〇世）による自作
茶碗である。
（『高橋家御蔵品入札』所載）

る寸前の竹であったのであろう、櫛先はおおらかに撓められ薄く削られる。この手の竹は総じて火を拾っても折れやすく曲げにくいいため、櫛先が薄くなったものと考えられる。遠州作の茶杓は、その茶風を反映してか総じて薄く華奢な作が多いが、素材の性質に負うところも大きいと考える。筒は真削りで、下部は九カ所削られている。面取りした箇所は小堀遠州により

メ 式部卿様まいる 宗甫

と定家様の墨書が見られる。現在、筒の宗甫の署名下には経年変化による穴がある。収納する桐箱には甲部に「茶杓」と二文字がある。

そこで、図譜に所載の図と比較してみると(図22)のようになる。先ず寸法は一七・六^{ナニ}と同一である。次に茶杓の様子についても節の上下の様子が合致する。また筒についても筒下部の削りは九カ所あったが、その細部にいたる部分(背面)も描かれている。箱甲の「茶杓」二文字は、これまで筆者不明とされていたが、『茶杓図譜』の記載には不昧筆とあり松平不昧(一七五一―一八一八)による筆跡であることが判明した(図23)。

現在、「式部卿様参る」の茶杓には古筆了伴(一七九〇―一八五三)による筒墨書の極が付属する。極を収納する桐箱には溝口家の所蔵品であることを示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印(図24)が貼られている。以上から「式部卿様まいる」は溝口家旧蔵の茶杓である。

この茶杓は『新発田御道具帳』の「茶杓之部」において「宗甫茶杓」とする三件のうちのいずれかに該当すると考えられる。⁽²⁷⁾また、茶杓の形状や寸法が克明に模写される点から、本書は家伝の茶杓および直諒により収集された茶杓を原寸大で書き写されたものである。

そこで『茶杓図譜』および『一二月茶杓』から『新発田御道具帳』と合致する茶杓をみてみたい。



図24
極を収納する箱
(北村美術館蔵、撮影筆者)

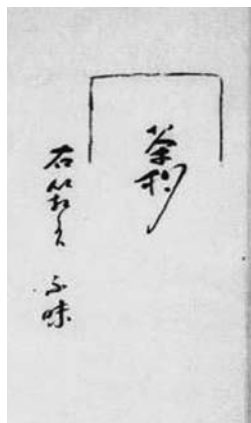


図23 箱甲の墨書
右、「式部卿様まいる」を
収納する箱
(北村美術館蔵、撮影筆者)
左、『茶杓図譜』の所載図



図22 遠州作茶杓「式部卿様まいる」の比較
右、北村美術館蔵(『京・四季の茶事』より転載)
左、『茶杓図譜』(東京大学史料編纂所蔵)所載



1 見廟御作御茶杓 直溥公御箱書 (〔図1〕、〔図2〕)

新発田藩十代藩主、翠濤・溝口直諒による茶杓二作を一箱に収めている。一つ (図1) は全長一七・五^{センチ}。節上は茶色、節下は黒色で薄作である。筒に銘はなくメ印と花押のみが書かれる。もう一方 (図2) は全長一七・七^{センチ}。白竹を用いており銘はなく筒に花押のみが書かれる。『茶杓図譜』中には以下のような記述がある。

(中略)

拙作なれとも皆傳のしるしに家にのこし置

(中略)

とあり、直諒が石州流茶道の皆伝を受けたときに、記念に作成した二本の茶杓であることがわかる。直諒は茶の湯を新発田藩茶道であった半求庵・阿部休巴 (宗休。一七八五―一八五三) に茶を学んだとされ、⁽²⁸⁾この茶杓は休巴から石州流の皆伝を受けたとき作られたと考えられる。箱書は直諒の長男で新発田藩一代藩主・直溥 (一八一九―一八七四) による。以上二件はいずれも『茶杓図譜』下巻所載。(以下、上巻下巻のみを記す)

2 利休作茶杓 外箱見廟御筆 (〔図3〕)

千利休 (一五二二―一五九一) による茶杓である。全長一八・一^{センチ}。総体に薄く蟻腰である。櫛先は丸みを帯びて、典型的な利休形の茶杓である。筒は草削り、竹皮を少し削り残している。形状としては上下部分が細くなっており、ぶりぶりの様子をみせている。筒栓にメ印はなく代りに朱漆で利休のケラ判があり、下部には元伯宗旦 (一五七八―一六五八) による「旦」の字と花押が朱漆で書かれるのが認められる。上巻所載。

3 利休直茶杓 (〔図4〕)

利休により直された茶杓である。全長一七・八^{センチ}。総体に薄く蟻腰である。竹に染みがみられる。筒は真削りで、メ印と「利休ノナオシ」の墨書がある。同書には「利休直し茶杓宗関筒」とあることから宗関・片桐石州 (一六〇五―一六七三) による筒墨書である。上巻所載。

4 宗甫作茶杓 銘一ツ松 箱書宗甫 (〔図5〕) (〔図7〕)

小堀宗甫 (遠州) による茶杓である。全長一七・八^{センチ}。薄作である。節下から竹皮が剥がれおり、ひとつの見所となっている。筒のメ印は遠州の筒墨書中でも珍しく、署名が宗甫とあるのみである。銘である「一ツ松」は慈鎮和尚の歌「我身ころなるをにたてる一松よくもあしくも又たくいなし」による。図譜では箱の甲および裏の墨書、包布も所載される。上巻所載。

5 宗甫茶杓 銘山の井 筒弧峰子名アリ (〔図8〕)

小堀遠州による茶杓である。全長一八^{センチ}。景色のある竹を用いている。薄い。腰はやや高くなっているが穏やかな作行きである。筒は下部を削り落とし、筒の下部には遠州の筆跡で「山乃井 孤蓬子」とある。墨書のある正面は樋が通った部分であるとみえ、栓の部分にも窪みがみられる。上巻所載。

6 宗甫茶杓

『新発田御道具帳』の記載では小堀遠州作による茶杓は先の「式部卿様まいる」(北村美術館蔵)、「一ツ松」、「山の井」(以上二件は『茶杓図譜』所載) 以外に三件が所載される。『茶杓図譜』中、遠州作の茶杓は先の紹介した茶杓以外に二件の所載がある。これらは蔵帳所載の記述と合致すると考えられるが特定する事はできなかったため、二

件を画像によって紹介する。

・小堀遠州作茶杓「森河小左様」〔図9〕

小堀遠州による茶杓である。筒には「メ 森河小左様 小遠江」とあり、贈筒である。「森河小左」とは『寛政重修諸家譜』中、森川氏で小左衛門を名乗った森川之俊（一五九九―一六八二）であると考えられる。全長一八・一。節下は竹皮をはぎ取られ、節上は白竹で薄作である。上巻所載。

・小堀遠州作茶杓「雲谷庵主等益さま」〔図10〕、〔図11〕

小堀遠州による茶杓である。筒には「メ 雲谷庵主等益さま 宗甫」とあり、贈筒である。「雲谷庵主等益」とは、雲谷等顔の次男で毛利家に仕えた雲谷等益（一五九一―一六四四）のことである。全長一八・二^{ナナ}_{センチ}。節下は竹皮をはぎ取られ、節上は白竹で薄作である。同書では箱書は以下のような記述がある。

雲谷等益ト有ル

宗甫作茶杓（花押）

とあり、松平不昧による箱墨書があったとされる。上巻所載。

7 織部殿茶杓〔図12〕

古田織部による茶杓である。全長一八・一^{ナナ}_{センチ}。櫛先は長い。節は中節よりもやや下部で、この時代の武将にみられる作例である。総体に薄くつくられ、腰はくの字のように高くなっている。筒は真削りで、メ印と織部の花押が認められる。上巻所載。なお上巻には二件の織部茶杓があるが、後述するように乾坤入之部は家祖伝来の品であることから「織部殿茶杓」（乾坤入）が合致するとした。

8 佐久間将監実勝茶杓〔図13〕

佐久間将監実勝（一五七〇―一六四二）による茶杓である。全長一八・五^{ナナ}_{センチ}。細身の茶杓である。樋の部分に二条の景色をみる事ができる。筒は真削りである。メ印は丸印があり「佐将監」の墨書が認められる。上巻所載。

9 徳祐公作茶杓 銘清風〔図14〕

肥前平戸藩四代藩主、松浦鎮信（一六二二―一七〇三）による茶杓である。鎮信は石州流の茶人で、自身により鎮信流を興した。徳祐公とあるのは鎮信が元禄二年（一六八九年）に隠居し、天祥庵祐徳円恵と号したことによる。全長一八・六^{ナナ}_{センチ}。薄く細身で腰はなく真直ぐな茶杓である。筒には正面は面取りされ、栓のところにメ印があり右側面に「清風」、左側面には花押がある。上巻所載。

10 桑山左近殿茶杓〔図15〕

桑山左近（一五六〇―一六三二）による茶杓である。全長一八・二^{ナナ}_{センチ}。総体に薄い。材となった竹は胡麻竹の根に近い部分が用いられ、節に竹根がある。筒は細く作られメ印と墨書がある。上巻所載。

11 細川三斎公作茶杓箱書了伴〔図16〕

細川三斎（一五六二―一六四六）による茶杓である。全長一九・五^{ナナ}_{センチ}。節無し。図からもわかるように極めて薄い。筒は真削り。墨書は「わしはし」か。上巻所載。

12 作州公造茶杓 銘浮雲〔図17〕

銘「浮雲」の茶杓である。作州公とは宇喜多秀家（一五七二―一六五五）のことで、同人作の茶杓と考えられる。全長一八・一^{ナナ}_{センチ}。総体に薄く中節である。櫛先はおおらかで、細い作りである。筒には墨書にて「うき雲 作州公 石」とあることから、茶杓は作州公、筒

の筆跡は片桐石州による。筒は行の削りである。上巻所載。

13 空中斎茶杓 銘遠山 彫銘空中(〔図18〕)

空中斎・本阿弥光甫(一六〇一―一六八二)による茶杓である。全長一八・二_{チセ}。竹根に近い部分を用いており三ツ節である。虫食いが二箇所あり見どころとなっている。黒く染みた竹で持ち手は厚いが權先に行くに従い薄くなっている。筒は面取りした所を正面に「遠山光(花押)」とあり、背面にはほかの空中作茶杓の筒墨書にみられる花の形をした花押が認められる。上巻所載。

14 佐川田喜六茶杓 銘都鳥(〔図19〕)

喜六・佐川田昌俊(一五七九―一六四三)による茶杓である。全長一八・五_{チセ}。薄作である。景色のある染み竹を用いている。筒は真削りである。筒墨書には「メ 都鳥 昌俊(花押)」とある。下巻所載。なお先述した高橋箒庵の売立目録である『一木庵高橋家所蔵品入札目録』には「六八 佐川田喜共筒茶杓 銘都鳥」との所載がある。また、『茶杓三百選』(一九七七年、河原書店)にも所載。

15 野田酔翁茶杓 銘源七(〔図20〕)

石州流の流れをくむ鎮信流野田派の祖である野田酔翁(一六五二―一七三二)による茶杓である。全長一九・五_{チセ}。蟻腰で、節上から一条の雪割がある。筒は染み竹に細かな粉が吹き出したような竹が用いられている。筒には「メ印」と「茶杓 源七 酔翁」の墨書がある。上巻所載。

16 小猿動閑茶杓 銘女郎花(〔図21〕)

陸奥仙台藩主伊達綱村の茶道頭、小猿動閑(二代清水道閑。一六一四―一六九一)による茶杓である。全長一八・四_{チセ}。作行きは薄く、蟻腰である。權先は丸みを帯びておおらかに削られる。筒は正

面部分に竹皮を残すも、総体には真削りである。筒墨書には「メ 女郎花 小猿」とある。下巻所載。

17 一尾伊織作茶杓 銘鶴首(〔図22〕)

江戸時代初期の旗本、一尾伊織(一五九九―一六八九)による茶杓である。全長一八・四_{チセ}。染み竹に細かな胡麻の模様が入った竹を使用している。權先はほぼ直角に撓められている。筒は真削りである。筒墨書で「メ 鶴頸」とある。下巻所載。

18 鷹司輔信公茶杓 銘都喜巳(〔図23〕)

鷹司輔信(一六八〇―一七四一)による茶杓である。全長二〇・五_{チセ}。節無しのほぼ真つ直ぐな茶杓である。權先のためは急であり、やや太い印象を受ける。筒は真削りで「メ印」があり、墨書にて「都喜巳」(つきみ)とある。上巻所載。

19 近衛應山公茶杓 銘埋火(〔図24〕)

應山・近衛信尋(一五九九―一六四九)による茶杓である。全長一八・二_{チセ}。側面から見ると真つ直ぐな茶杓である。節下部分のおっとりした竹皮が剥がれ、見どころとなっている。雰囲気としては遠州調の作風に近い。權先は丸く撓めもおおらかである。筒には墨書で歌銘「埋火のしたはこかれしときよりもかりなくまゝにおりるこひしき」とある。上巻所載。

20 六々山人象牙茶杓 銘丈山(〔図25〕)

六々山人・石川丈山(一五八三―一六七二)による象牙茶杓である。本図所載の象牙茶杓は「右石川丈山好筒同作」とあることから丈山の好みによる。全長一八・二_{チセ}。利休型の象牙茶杓と比較してみると權先が太いことが特徴である。筒は真削りである。筒墨書には丈山特有の隸書体で「象牙」とある。下巻所載。

21 石州公作節下り茶杓 野田醉翁手紙狂哥入〔図26〕

石州流の祖である片桐石州による茶杓である。節が中心より下にあることから、本作を指すものと考えられる。全長一八・一^{チセン}。染み竹を用いて、景色がある茶杓である。筒には墨書で「宮織部様上 石」とある。なお、『茶杓図譜』の記述では野田醉翁の消息が付属するとされる。上巻所載。

22 片桐新之丞作茶杓 銘春霞〔図27〕

片桐新之丞による茶杓である。全長一八・五^{チセン}。細身の茶杓である。節上部分に竹の滲みた部分がある。筒は竹皮を残した草削りである。筒正面の墨書には「メ 春霞」とのみある。なお、『寛政重修諸家譜』によれば片桐家で新丞と名乗ったのは片桐祐賢がいる。下巻所載。

23 不昧公茶杓 銘陶靖節〔図28〕

出雲松江藩第七代藩主、不昧・松平治郷による茶杓である。全長一八・四^{チセン}。総体に華奢な作行きの茶杓である。權先はほかの不昧作にみられるように少し尖っていおり、權先の撓めも急であるが、おおよそさがみられる。筒は權先の寸法に合わせたのか太い竹が用いられている。筒墨書には「メ 陶靖節（花押）」とある。なお、不昧による同銘の茶杓は一件確認される。陶靖節は陶淵明のこと。下巻所載。

24 大徳寺天室和尚茶杓共筒〔図29〕

大徳寺一九〇世、天室宗竺（一六〇五―一六六七）による茶杓である。全長一八・三^{チセン}。胡麻竹を用いている。筒墨書には「メ 宗関公一妙子」とあり宗関・片桐石州への贈筒であると考えられる。なお、一妙子は天室の号である。下巻所載。

25 怡溪和尚作茶杓 箱書木下清兵衛伊豫守〔図30〕

大徳寺二五三世、怡溪宗悦（一六四四―一七一四）による茶杓である。全長一八^{チセン}。薄作である。材となったもとの竹節には付き枝があつたのであろう、枝元部分を削り落とし、節下部分とともに景色としている。節下より竹皮が剥がれている。筒には墨書で「清兵衛殿

怡溪」とあり贈筒である。メ印の代りに花押が書かれる。上巻所載。

26 清巖和尚作茶杓〔図31〕

大徳寺一七〇世、清巖宗渭（一五八八―一六六二）による茶杓である。全長一九・五^{チセン}。茶杓は太い印象を受けるが側面からの図では薄作である。筒にはメ印はなく、墨書で「霜善伽観夢懷（花押）」とある。筒の上部には割れた部分の補強のためか紐が巻かれている。上巻所載。

27 江雪和尚作茶杓〔図32〕

大徳寺一八一世、江雪宗立（一五九五―一六六六）による茶杓である。全長一八・一^{チセン}。染み竹を用いており薄作である。權先は薄く削られる。筒は真削りである。筒には墨書にてメ印は「○」、「眼着夜前寸七来 宗立（花押）」とある。上巻所載。

28 龍安寺僖首茶杓〔図33〕

千宗旦門人、龍安寺僖首座（一六一六―一六九六）による茶杓である。全長一八・二^{チセン}。節は中節よりも上部にある。節下の竹皮が剥がれ見どころとなっている。染み竹を用い、部分的な染みが控えめな印象を与える。權先はほぼ直角に撓められている。筒は真削り。墨書にて「龍安下之僖首座（花押）」とある。僖首座は茶杓の制作で知られる。上巻所載。

29 信海茶杓共筒 極札一枚〔図34〕

『茶杓図譜』では萩坊信海とあるが、豊蔵坊信海の誤記載であろう。豊蔵坊信海（一六三五―一六八八）による茶杓である。全長一八・七^{チセン}。

薄作である。図譜から權先は二段撓めになっていることがわかる。筒は草削りである。筒墨書には「メ わくらは 信海」とある。図譜の記述では極札が付属する。下巻所載。

30 江月和尚茶杓 銘櫛〔図35〕

大徳寺一五六世、江月宗圀（一五七四―一六四三）による茶杓である。全長一八・八^{チセ}。景色に富んだ茶杓である。中節で權先は少し曲がある。筒は真削り。筒には墨書でメ印および「櫛々（花押）」とある。上巻所載。

31 蓋師左近作茶杓 銘鶯宿梅〔図36〕

挽物師戸澤左近による茶杓である。全長一七・三^{チセ}。材は梅の木である。本作の形状は茶箱用などに組まれる芋茶杓である。筒は真削りである。筒墨書には「印 鶯宿梅妹茶杓 御蓋師 左近印」とある。下巻所載。

32 半々庵茶杓 銘埋火〔図37〕

半々庵・伊佐幸琢（初代。一六八四―一七四五）による茶杓である。全長一七・七^{チセ}。薄作である。筒正面は面取りされ「埋火 半々庵」とあり筒四方には「あらむれにたるうつみ火の板まより袖たしらなし 山おろしに」の歌がある。下巻所載。

33 半々庵茶杓〔図38〕、〔図39〕

半々庵の茶杓は先の「埋火」茶杓の他に二件が所載される。『新発田御道具帳』に所載の半々庵作茶杓は二件のうちのいずれかと考えられるため画像を紹介する。前者は全長一七・三^{チセ}。細見で華奢な作である。後者は全長一八・二^{チセ}。太作で權先の撓めはおおらかである。いずれも無銘である。

34 宗中作茶杓 銘雛鶴〔図40〕

小堀宗中による茶杓である。全長一七・五^{チセ}。薄作である。節上は

黒味がかっており白い斑点がある。節下はわずかな曲がある。筒墨書は「メ ひな鶴 宗中」とある。下巻所載。

35 宗中作茶杓 銘みづかき〔図41〕

小堀宗中による茶杓である。全長一七・八^{チセ}。薄作である。茶杓全体、中央あたりを境に片身替りとなっている。筒正面の墨書には「メ みづかき 宗中」とあり、背面には伊勢物語一七〇番の住吉行幸を出典として歌名である「むつましと君はしらなみみづかきのひさし世より祝ひそめてき」とある。下巻所載。

36 小堀三作十二ヶ月茶杓 箱書宗本蓬露〔図42〕、〔図54〕

小堀宗本、蓬露兄弟による一二ヶ月および、父・宗中による閏月の茶杓である。ところで東京大学史料編纂所には「一二月茶杓」が所蔵される。本書は小堀兄弟による茶杓一二ヶ月と小堀宗中による閏月茶杓の合計一三本が図入りで紹介される。その性格は先にみた『茶杓図譜』と同様に画は林勝鱗、筒墨書などの筆写は直諒によるものであり、同家所蔵の茶杓を書写したもののひとつである。一二ヶ月はすべて歌銘であるが宗中による茶杓のみ銘「閏」である。なお歌銘の出典は藤原定家（一一六二―一二四一）による自撰歌集『拾遺愚草』中の「後仁和寺宮花鳥」にある花鳥各一二首である。正月から七月、九月、十月、十一月は花、八月、十一月は鳥をそれぞれ出典としている。

・歌銘「正月」〔図42〕

小堀宗本による茶杓である。全長一七・八^{チセ}。節上から權先にかけて二条の筋があり、權先は尖りをみせる。筒墨書には「正月 打ちなひき春くる風の色なれや日をへて染むる青柳之糸 宗本造之」とある。定家による歌では柳に因む。

・歌銘「二月」〔図43〕

小堀宗本による茶杓である。全長一七・八_{チセ}。櫛先は尖りをみせる。筒墨書には「二月 かさしをる道行人のたもとまでさくらにさくらぎほ二月のそら 宗本」とある。定家による歌では桜に因む。

・歌銘「三月」〔図44〕

小堀蓬露による茶杓である。全長一八・五_{チセ}。染み竹に胡麻がある竹を用いた茶杓である。筒墨書には「三月 ゆく春のかたみとやさく藤の花そをだにのちの色のゆかりに 蓬露」とある。定家による歌では藤に因む。

・歌銘「四月」〔図45〕

小堀蓬露による茶杓である。全長一八・五_{チセ}。胡麻竹が用いられている。筒墨書には「四月 白妙の衣ほすてふ夏のきてかきねもたわにさける卯花 蓬露」とある。定家による歌では卯花に因む。

・歌銘「五月」〔図46〕

小堀宗本による茶杓である。全長一八_{チセ}。節上から櫛先にかけて少し胡麻がある。筒墨書には「五月 郭公鳴ほととぎすや五月の宿かほに必にほふのきのたち花 宗本」とある。定家による歌では廬橘（花橘の別称）に因む。

・歌銘「六月」〔図47〕

小堀宗本による茶杓である。全長一七・五_{チセ}。節上に虫食いが一カ所ある。筒墨書には「六月 おほかたの日かけにいとふ六月みなすきの空さへをしきとこなつのはな 宗本」とある。定家による歌では常夏（撫子の別称）に因む。

・歌銘「七月」〔図48〕

小堀蓬露の茶杓である。全長一八・五_{チセ}。櫛先は尖りをみせ、胡麻

竹が用いられる。筒は曲がつており、自然の形状を生かしたものである。筒墨書には「七月 秋ならでたれもあひみぬ女郎花ちきりやおきしほしあいの空 蓬露」とある。定家による歌では女郎花に因む。

・歌銘「八月」〔図49〕

小堀蓬露の茶杓である。全長一八・五_{チセ}。櫛先の撓めは急である。節上が削られており、材となった竹にはもともと付き枝があつたと考えられる。筒も少し曲がりをみせる。筒墨書には「八月 詠なぐめつつ秋の半もすきの戸にまつほとしるき初鴈の聲 蓬露」とある。定家による歌では初鴈に因む。

・歌銘「九月」〔図50〕

小堀宗本による茶杓である。全長一八_{チセ}。筒には「九月 花薄草のたもとの露けさをすてて暮れゆく秋のつれなさ 宗本」とある。定家による歌では薄に因む。

・歌銘「十月」〔図51〕

小堀宗本による茶杓である。全長一七・六_{チセ}。筒墨書には「十月 神無月霜夜の菊のにははすは秋のかたみになにをおかまし 宗本」とある。定家による歌では残菊に因む。

・歌銘「十一月」〔図52〕

小堀蓬露の茶杓である。全長一七・七_{チセ}。筒は少し曲がりをみせる。筒墨書には「十一月 ちとりなくかもの川瀬のよハの月ひとつにみかく山あひの袖 蓬露」とある。定家による歌では千鳥に因む。

・歌銘「十二月」〔図53〕

小堀蓬露の茶杓である。全長一八・五_{チセ}。筒墨書には「十二月

いろいろつむかきねの雪の比ながら年のこなたに匂ふ梅かえ 蓬露造之」とある。定家による歌では早梅に因む。

・小堀宗中作「閏」(〔図54〕)

小堀宗中の茶杓である。全長一八^{ナニ}。筒墨書に「閏」とある。節より上部に胡麻が見られ、胡麻竹を用いた茶杓である。筒も同種の竹を用い、面取りされている。『茶杓一二ヶ月 全』には宗本および蓬露による一二ヶ月の茶杓のほか、小堀宗中による銘「閏月」の茶杓も所載される。以上宗中、宗本、蓬露の三人による茶杓から「小堀三作」として所載される。

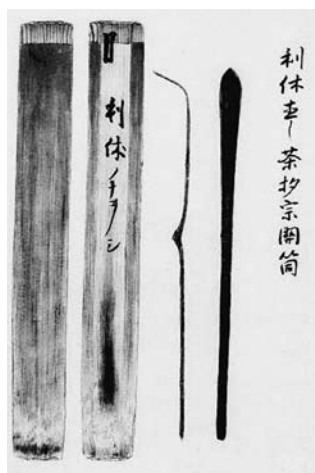
37 蓬雪作茶杓 歌銘山の端 (〔図55〕)

蓬雪・小堀権十郎(一六二五―一六九四)による茶杓である。全長は一八・六^{ナニ}。節上より薄作である。櫛先の撓は、竹を曲げるときに弱い火を時間を掛けて集め、一気呵成に曲げたのであろう、鋭い曲がりを見せる。筒墨書は同人により歌銘「山の端」がある。上巻所載。

38 半求庵茶杓 銘腰みの (〔図56〕)

新発田藩茶道であった半求庵宗求・阿部休巴による茶杓である。全長一八・五^{ナニ}。茶杓はやや厚く削られる。茶杓の景色は上部に白竹がよくでているが下部は染みがある。筒墨書は正面に「腰蓑 行年卒八翁 半庵宗求(花押)」、背面には「やふれ筒 為国用作之置」とある。やふれ筒とは、筒正面にある署名下の虫食いをさすものと考えられる。下巻所載。

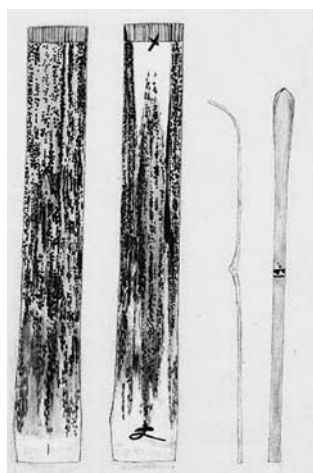
以上、『新発田御道具帳』と合致する茶杓では現存する「式部卿様まいる」(北村美術館蔵)をはじめ、『茶杓図譜』、『一二月茶杓』から五四件を紹介することができた。



〔図4〕
千利休直し片桐石州筒



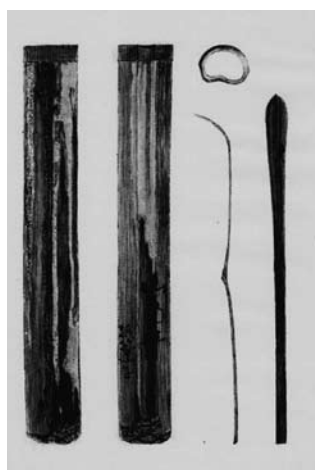
〔図3〕
千利休作千宗旦筒



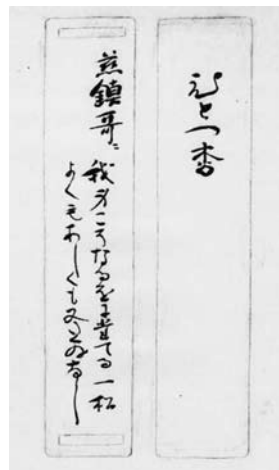
〔図2〕
溝口直諒作共筒



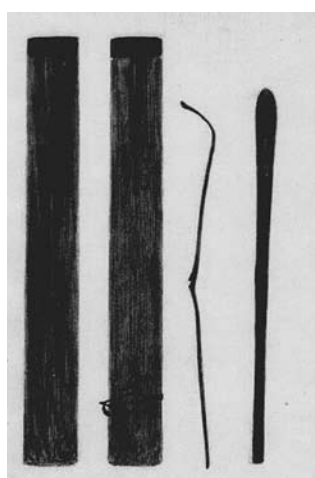
〔図1〕
溝口直諒作共筒



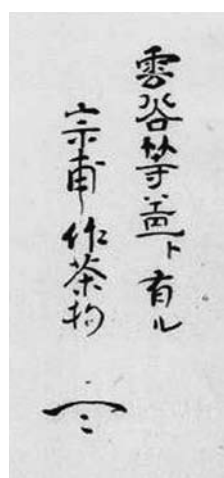
〔図8〕
小堀遠州作共筒
銘「山の井」



〔図5〕 小堀遠州作共筒 銘「一つ松」
〔図6〕 同袋
〔図7〕 箱墨書



〔図12〕
古田織部作共筒



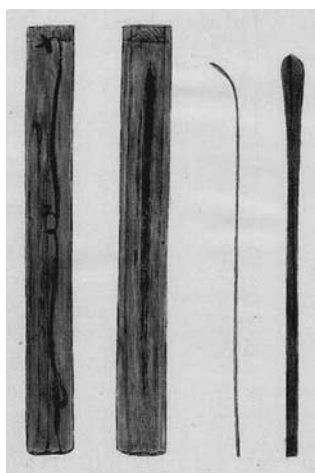
〔図10〕 小堀遠州作共筒
銘「雲谷庵主等さま」



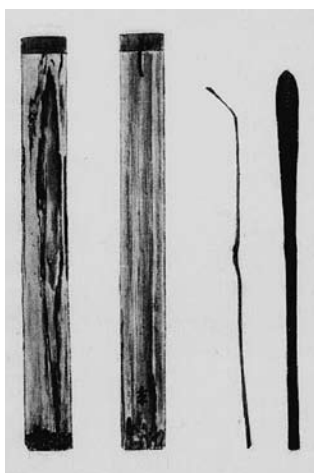
〔図11〕『茶杓図譜』での記述



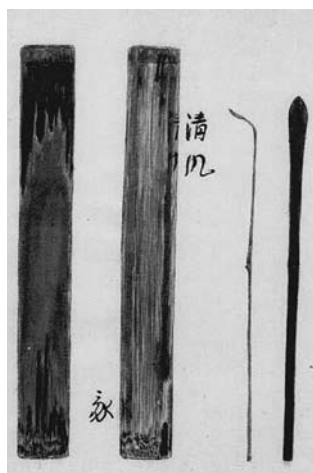
〔図9〕
小堀遠州作共筒
銘「森川小左様」



〔図 16〕
細川三斎作共筒
銘「わしかは」



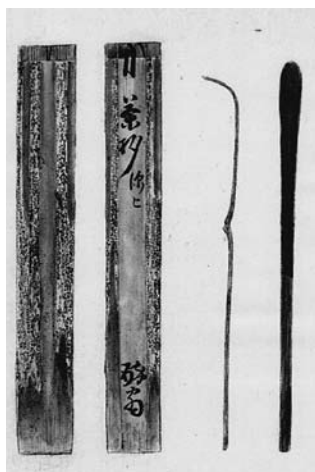
〔図 15〕
桑山左近作共筒
銘「山の井」



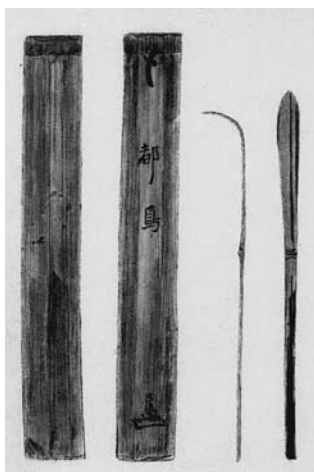
〔図 14〕
松浦鎮信作共筒
銘「清風」



〔図 13〕
佐久間将監實勝作共筒



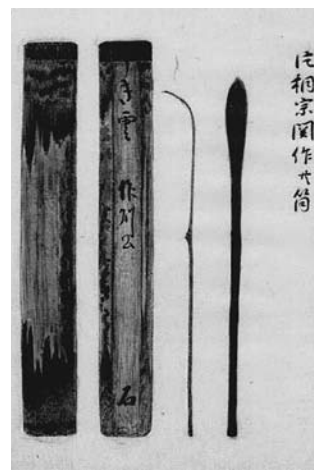
〔図 20〕
野田醉翁作共筒
銘「源七」



〔図 19〕
佐川田昌俊作共筒
銘「都鳥」



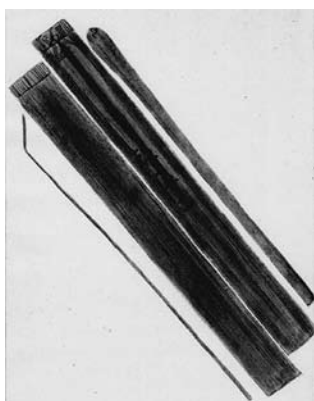
〔図 18〕
本阿弥空中作共筒
銘「遠山」



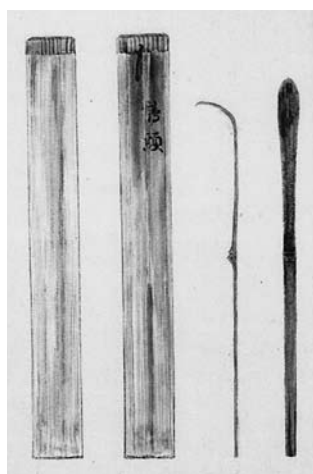
〔図 17〕
宇喜多秀家作共筒
銘「浮雲」



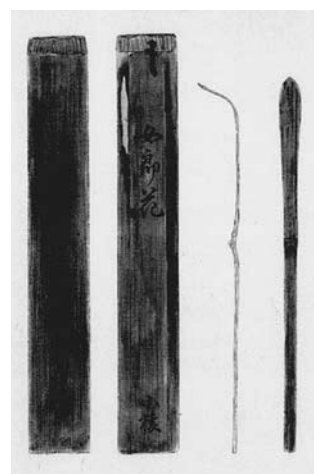
〔図 24〕
近衛信尋作共筒
銘「埋火」



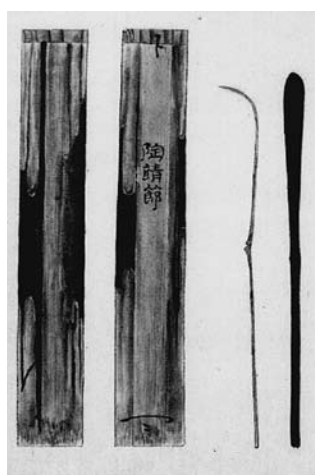
〔図 23〕
鷹司輔信作共筒
銘「つきみ」



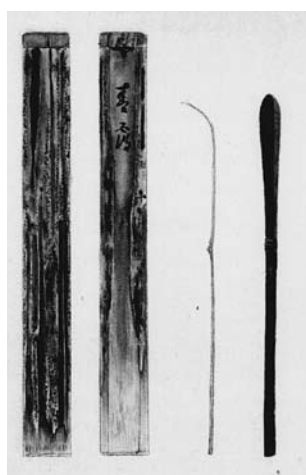
〔図 22〕
一尾伊織作共筒
銘「鶴首」



〔図 21〕
小猿道閑作共筒
銘「女郎花」



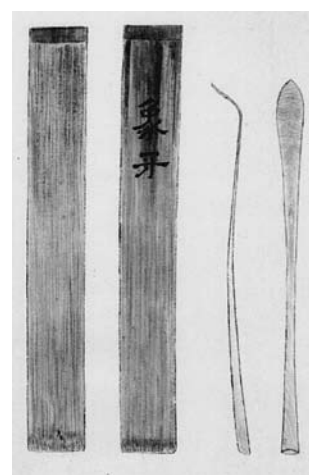
〔図 28〕
松平不昧作共筒
銘「陶靖節」



〔図 27〕
片桐新之丞作共筒
銘「春霞」



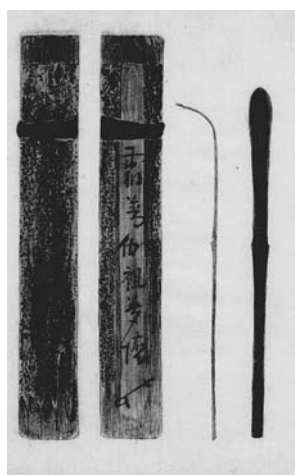
〔図 26〕
片桐石州作共筒
銘「宮織部様上」



〔図 25〕
石川丈山作共筒
銘「丈山」



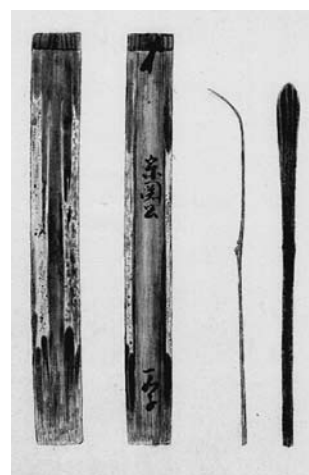
〔図 32〕
江雪宗立作共筒
銘「眠着夜前寸七来」



〔図 31〕
清巖宗渭作共筒
銘「霜善伽観夢懷」



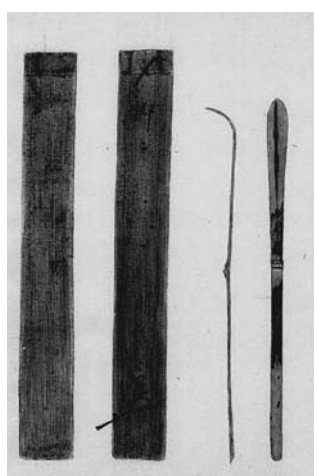
〔図 30〕
怡溪宗悦作共筒
銘「清兵衛殿」



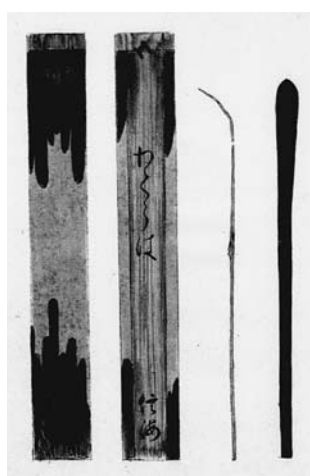
〔図 29〕
天室宗竺作共筒



〔図 36〕
戸澤左近作共筒
銘「鶯宿梅」



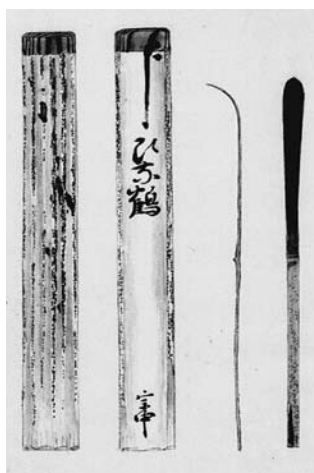
〔図 35〕
江月宗玩作共筒
銘「櫛々」



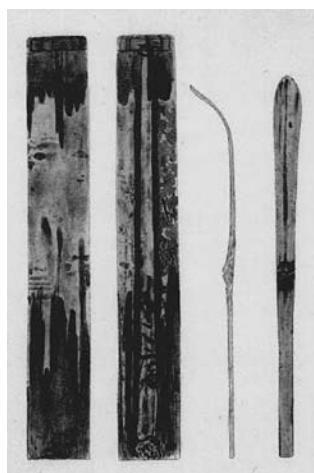
〔図 34〕
豊蔵坊信海作共筒
銘「わくらは」



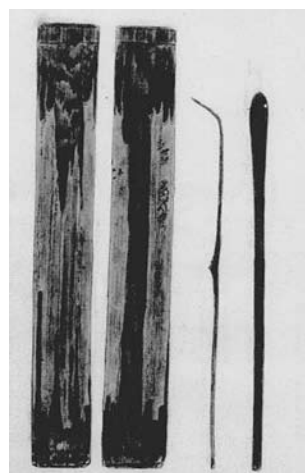
〔図 33〕
龍安寺喜首座作共筒
銘「山の井」



〔図 40〕
小堀宗中作共筒
銘「ひな鶴」



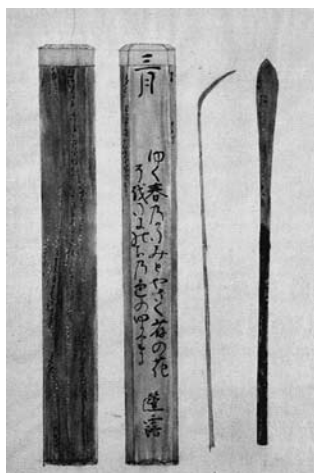
〔図 39〕
伊佐幸琢作共筒
銘「伊佐幸琢」



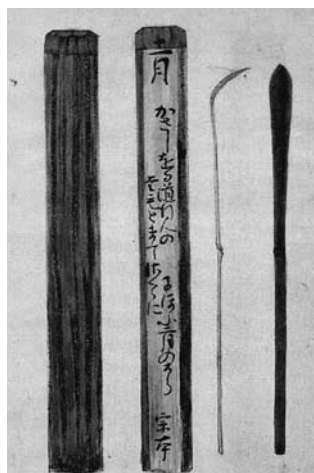
〔図 38〕
伊佐幸琢作共筒
銘「伊佐幸琢」



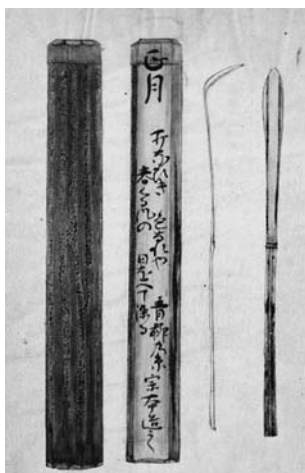
〔図 37〕
伊佐幸琢作共筒
歌銘「埋火」



〔図 44〕
小堀蓬露作共筒
歌銘「三月」



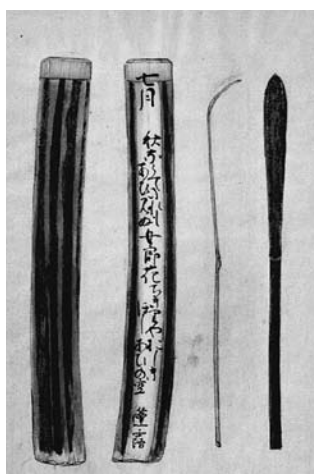
〔図 43〕
小堀宗本作共筒
歌銘「二月」



〔図 42〕
小堀宗本作共筒
歌銘「正月」



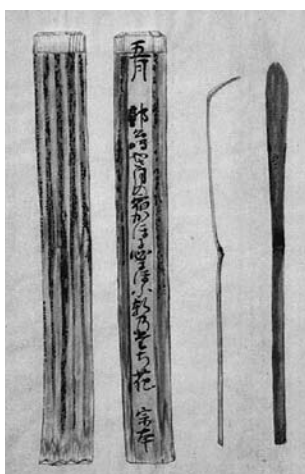
〔図 41〕
小堀宗中作共筒
銘「みつ」



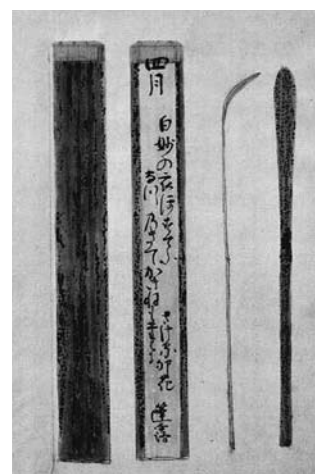
〔図 48〕
小堀蓬露作共筒
歌銘「七月」



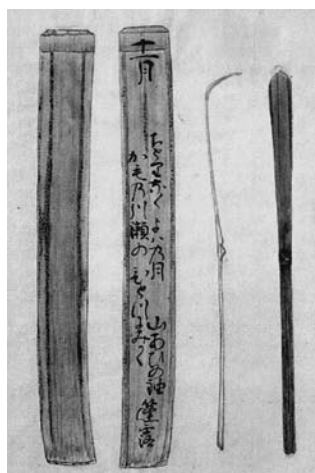
〔図 47〕
小堀宗本作共筒
歌銘「六月」



〔図 46〕
小堀宗本作共筒
歌銘「五月」



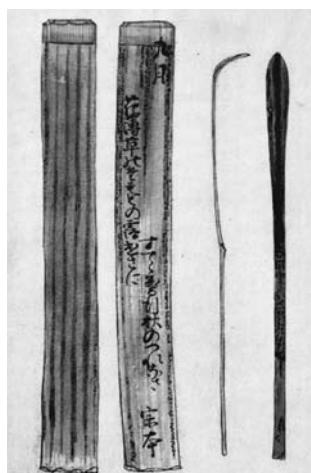
〔図 45〕
小堀蓬露作共筒
歌銘「四月」



〔図 52〕
小堀蓬露作共筒
歌銘「十一月」



〔図 51〕
小堀宗本作共筒
歌銘「十月」



〔図 50〕
小堀宗本作共筒
歌銘「九月」



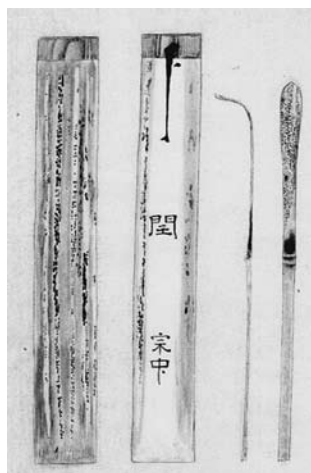
〔図 49〕
小堀蓬露作共筒
歌銘「八月」



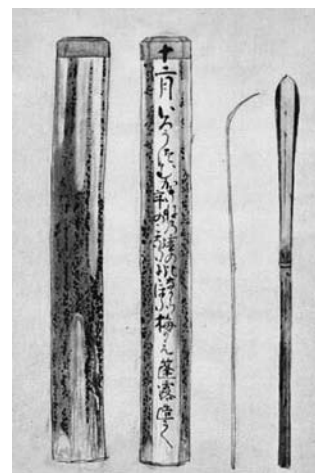
〔図 56〕
阿部休巴作共筒
銘「腰みの」



〔図 55〕
小堀蓬雪作共筒
歌銘「山の端」



〔図 54〕
小堀宗中作共筒
銘「閏」



〔図 53〕
小堀蓬露作共筒
歌銘「十二月」

三 考察 溝口家の茶道具収集

本稿では、溝口家が新発田において所蔵した茶の湯に関係する道具のうち、現存するものおよび文献上で合致するものを紹介することができた。先に紹介した器物以外にも、『新発田御道具帳』は溝口家のコレクションを彩る器物も存在する。たとえば「御釜之部」には以下のような記述がある。

乾坤入

一 太閤公拝領之御釜

この釜は、豊臣秀吉から新発田藩初代藩主・溝口秀勝（一五四八―一六一〇）が拝領したと考えられる。秀勝と秀吉を巡っては、秀吉没後に所用の刀装を譲り受け、その拵は「朱塗金蛭巻大小」（東京国立博物館蔵）として現存する。釜や拵を含め豊臣家からの譲渡を巡る両者の交渉が興味深い。

ほかには、溝口家の所蔵品中、茶入「大概」が存在したようである。『新発田御道具帳』では茶入「大概」について、以下のような記述がある。

但御名物蛭胴高同品名物御座候、御分置被為在り箱之御茶入之處

御蓋召て数子入申候、尤宗甫真跡にて生子手の本歌御座候右宗中

鑑定同人真筆之被申俄作之置

記述によれば先述の「溝口胴高」、「蛭」とともに「大概」も溝口家においては主要な茶入であったことと、この茶入が海鼠手の本歌であり、小堀宗中の鑑定もなされたことが述べられる。海鼠手とは瀬戸茶入の窯分け名の一つで金華山窯に属し海鼠状の釉がある。

現在、海鼠手本歌は「三輪山」（住友家旧蔵、現在の所在は不明）で

あるが、そもそもの本歌は溝口家が旧蔵した「大概」であると考えられる。なお茶入の分類中「大概手」と呼ぶ窯分けがあるが「美作ゆえ大概の人に好まれるというので大概手と遠州が戯れにいった」（『草人木書苑』³⁰）とされ、溝口家の所蔵した茶入「大概」は大概手の本歌と目される。なおこれまでのところ「大概」茶入の所在は不明である。

この茶入は先述した「溝口胴高」や「蛭」、「閑極法雲・東澗道洵両筆墨蹟」とともに小堀家から縣宗知を経て四代藩主・重雄によって入手された。これらの茶入や掛物は、家祖伝来の長持である乾坤入之部において収納された。重雄は悠山と号して、石州流の怡溪宗悦に茶を学んだ。先の小堀家から譲渡された器物には柳宮御庭方の縣宗知も関係していたが、重雄と宗知を巡っては五十公野御茶屋（新発田市）の作庭にも関与した。このような関係から、溝口家には小堀家の道具が入手されたものと考えられる。

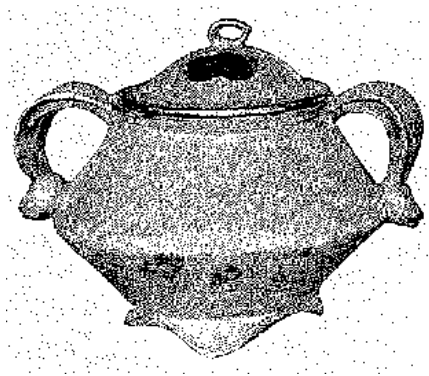


図 24 「御本兎耳香炉」
（『一木庵高橋家御所蔵品入札』所載）

その後、溝口家では石州流の茶の湯を嗜んだが、中でも十代藩主・直諒は特に茶の湯を好み翠濤と号した。また直諒は隠居後、退翁とも号して茶の湯を楽しんだ。その交遊は小堀宗中、芳村観阿、古筆了伴などがある。蔵帳中、宗中や観阿（号は白酔庵）などの箱

書や、了伴による極が多いのもそのためである。先の『文化情報学』でも明らかにしたように、大燈国師墨蹟「日山之賦」（個人蔵）は古筆了伴が所持したが、観阿の仲介を経て直諒が入手したものである。⁽³¹⁾

直諒と観阿の関係については「御本兎耳香炉」（一木庵高橋家所蔵品入札目録）所載。図25）の箱書にもみられる。箱書には以下のような記述があるとされる。⁽³²⁾

翠濤尊君草廬に初めて御入りの節、床に飾り置き候を御所望にて

進献す 天保十年亥中春七十五翁白醉庵観阿

記述から、直諒は観阿が浅草に営んだ草庵である白醉庵に招かれたとき、床の間に飾ってあった香炉を所望し、観阿が献じた内容である。このことから、直諒を中心として観阿らとは茶の湯を通じた重層的な交流があり、直諒が購入または所蔵した道具には多くの鑑識眼を経てきたと考えられる。また、このことは古筆了伴、小堀宗中など当時優れた鑑識眼をもった人物との交渉から、優れたコレクションを形成したと考えられる。

溝口家の所蔵品には、収納する箱に「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印（図26）が貼られる。蔵印にある碧雲山房とは、溝口直諒の書屋であったとされる。また、この居室は佐々木（『建築工芸叢誌』一九一三年）によれば「溝口家の以前の屋敷に大きな梧桐があつてそれが碧葉を雲間に張らしていて、その梧桐を望むに適した一の座敷があつたところから、その座敷に斯く名付けて額を掲げた」とあり、江戸屋敷における居室であった。

ところで十代藩主溝口直諒自筆による『名物重宝説』が東京大学史料編纂所に所蔵される。⁽³³⁾ 本書には以下のような記述がある。

乾坤長持入之道具名物ニして家宝とする品也尤とも実の名物

と右に準ずる品あり共にみだりに用うべからず

（中略）

以上の記述から、乾坤入之部の長持にある道具は家祖伝来の家宝であることがわかる。また、これらの道具をみだりに用いることを戒めている。



図 27 「乾」の蔵札
画像は瀬戸茶入
「大瀬戸茶入」の箱甲
（『大正名器鑑』所載）



図 26 「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印
画像は茶入「溝口洞高」の箱側面
（個人蔵、撮影筆者）



図 28 「秘」の蔵札
長方形の紙に「秘」の蔵印がみられる。
『新発田御道具帳』にある御秘蔵の分類は、茶道具においてこのような貼札があつたものと考えられる。画像は「呉須烏宝珠香合」（個人蔵）の箱側面（『和美の会 二〇〇六 東美アートフェア秋別冊』より転載）

先に紹介した蔵印のほかには方形の紙に「乾」または「坤」の一字が墨書されたものがある(図27)。これらが乾坤入之部の長持に保管された物品であり、家祖伝来の器物について付与された蔵印である。また、蔵帳中、「御秘蔵」という表記がみられる。この表記は溝口直諒による収集中、重宝した作品に付与したと考えられる。たとえば、掛物では大燈国師墨蹟「日山之賦」に付属する紙札があった。先の『文化情報学』でも明らかにしたように同墨蹟に付属する溝口直諒による入日記の記述では

弘化二乙巳年数寄屋ひらきに口切茶會あり其節はしめて此か
けものを用へる

とあり、直諒により入手した器物中、自身が名物とした器物についての蔵札であった。茶道具における秘蔵の分類は(図28)のような貼札があったと考えられる。



図29の右) 小堀蓬雪作共筒茶杓「若草」(個人蔵)
左) 箱甲および側面 (いずれも撮影筆者)

本稿では溝口家が所蔵した茶杓について『茶杓図譜』、『二月茶杓』から蔵帳と合致する茶杓を紹介した。今回の調査では小堀蓬雪作共筒茶杓「若草」(個人蔵、図29)の存在を確認した。茶杓は全長一八^{センチ}。蟻腰で、樋は深く薄作であり景色のある竹を用いており節が残されている。筒には墨書で後鳥羽院宮内卿(生没年不詳)による歌銘「若草 うすくさき野辺の緑のわか草にあとまて見ゆるゆきのむらきへ」とある。⁽³⁴⁾ 収納する箱甲には小堀宗中による墨書により「蓬雪茶杓 共筒 若草歌銘」とあり、側面には「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印がある。茶杓に付属する極筆者不明)を収納する箱にも蔵印がある。⁽³⁵⁾ 以上の点から「若草」茶杓は溝口家の旧蔵品であると考えられる。しかしながら、『新発田御道具帳』および『茶杓図譜』には「若草」茶杓は所載されていなかった。このことは溝口家の所蔵した茶杓をはじめとする茶道具は蔵帳所載以外にも存在した可能性が考えられる。⁽³⁶⁾

今回は『新発田御道具帳』に注目したが、蔵帳所載の道具は直諒が当時江戸藩邸内で催された茶会で使用された。それらは家祖伝来の器物を保管した長持「乾坤入之」、直諒による収集中、特に重宝した器物を保管した長持「御秘蔵」などの分類があった。また溝口家が石州流の茶の湯を嗜んだ点から石州関係および流派に関係する道具を多く所蔵していることがわかった。また別項で紹介する『新発田御道具帳』の翻刻をみても明らかのように、これらの収集中のうち直諒の正室であった歌姫(見明院)の所持品も存在した。また、直諒による好み道具も所載する。たとえば「不識錦楓中次」がある。この中次は海晏寺に北條氏手植の楓を材として制作された中次である。なお、『定本石州流』第四卷(光村推古院・一九八五年)には海晏寺の北條氏手植の楓が枯れたため直諒に

より作られた十五の内の中次が所載しており連作の一つと考えられる。

このように溝口家のコレクションは四代重雄と十代直諒を中心にして、藩主を取り巻く人物の関係も大きくあつて蒐集がなされたものと考えられる。

四 むすび

以上から本稿の要旨は以下となる。

・溝口家が所蔵した茶道具のうち『新発田御道具帳』の翻刻をおこない茶碗、茶入、茶杓、棗、茶巾盥、水指、建水、釜、御炭斗、水次、灰器、茶箱を明らかにすることができた。

・本稿では溝口家旧蔵品の道具中、茶入六件（うち一件は記述のみ）、茶碗六件、茶器二件（うち一件は記述のみ）、建水一件、炭斗一件、水指二件（うち一件は記述のみ）、茶杓五五件（うち一件は蔵帳所載外）、香炉一件の計七五件を紹介した。

・現存する器物のうち古瀬戸茶入「溝口胴高」（個人蔵）の現存を確認した。同茶入に附属する添状中、縣宗知「証文」（図12）は、『大正名器鑑』において薩摩甫十茶入「玉水」（個人蔵）の添状とされてきたが、「溝口胴高」の添状であることを明らかにした。

・現存する茶杓のうち「若草」（個人蔵）は蔵帳および図譜での所載は確認されていない点を考えると、蔵帳所載以外の茶杓などの道具も存在したものと考えられる。

・溝口家の主要なコレクションは四代藩主・重雄および十代藩主・直諒の時代に蒐集された。このことは彼らが茶の湯文化に関係し、そのネットワークから蒐集がなされたものと考えられる。

となる。

なお、先にも述べたように、これまでのところ溝口家の売立は文献上でしか確認されておらず、目録は発見されていない。新発田藩溝口家は維新後に伯爵に叙された家柄である。しかしながら調査の過程から、子爵溝口家が存在した。⁽³⁷⁾子爵溝口家は大正十二年（一九二三年）に売立を行ったようであるが詳細は不明である。

今後の課題として、今回の調査で確認できなかった蔵帳に所載される茶道具の追跡調査と、蔵帳所載の道具が用いられた溝口家の茶会についての総合的な研究が求められる。また、本稿で紹介できなかった『茶杓図譜』に所載の茶杓や、蔵帳所載以外の茶杓「若草」をはじめとする茶道具の更なる研究を進めていきたい。溝口虎彦氏（福岡東洋陶磁美術館館長）の教示によれば同館には溝口家伝来品が所蔵されるのである。このほか近代では溝口久美子が大倉喜七郎に嫁いでおり、大倉集古館にも溝口家からの持参品が存在する。これらの調査も実施していきたい。溝口家の蔵帳については残る二冊（『七間之土蔵御道具帳』、『江戸御道具帳』）があり、包括的な調査を継続していきたい。

謝辞

本稿執筆にあたり調査のご協力をいただきました個人のご所蔵家各位、北村美術館館長 木下收氏、福岡東洋陶磁美術館館長 溝口虎彦氏、泉屋博古館分館 森下愛子氏、『新発田御道具帳』の調査にご協力いただきました新発田市立図書館館長 鈴木秋彦氏、溝口家文書資料の調査にご協力いただきました 東京大学史料編纂所、売立目録の調査に

ご協力いただきました 東京文化財研究所、同志社大学ラーネット記念図書館、同志社大学文化情報学部文献室、新発田御道具帳の翻刻について教示を賜りました同志社大学文化情報学部教授 矢野環氏に深謝申し上げます。

参考文献

- 朝倉治彦 『新発田藩溝口家書目集成』(二〇一三 ゆまに書房)
 新発田市史資料編纂委員会 『新発田市史』(一九八一 新発田市)
 新発田市史資料編纂委員会 『新発田藩史料』(一九六五 新発田市史料
 行事務局)
 荒木常能編 『越佐書画名鑑』(一九九三 新潟県美術商組合)
 千宗室 『草人木書苑 茶道美術 茶入』(一九八三 淡交社)
 北村勤次郎 『京・四季の茶事』(一九九〇 主婦の友社)
 『原色茶道大辞典』(一九七五 淡交社)
 小堀宗慶 『遠州流茶道宝典』(一九八三 東京堂出版)
 野村瑞典 『翠濤侯遺芳集』(一九八八 岡仙吸古堂)
 矢部良明責任編集 『茶道具の世界 第二一卷』(二〇〇〇 淡交社)

註

- 1 『新発田御道具帳』(請求記号S10717)、『江戸御道具帳』(請求記号S10716)、『七間之御土蔵御道具帳』(請求記号S10718)いずれも新発田市立図書館蔵)
- 2 宮武慶之「新発田藩溝口家所蔵の大燈国師墨について―物我両忘と日山賦を中心に―」、『文化情報学』第九巻第一号、九九―一二三頁、二〇一三年
- 3 宮武慶之「御掛物帳にみる新発田藩溝口家旧蔵の書画」、『新潟県文人研究』第十六号、越佐文人研究会、一五三―一九一頁、二〇一三年
- 4 新発田古文書解説研修会・新発田市立図書館編『溝口伊織家古文書目録第一集、新発田市古文書研修会・新発田市立図書館、二〇〇四年
- 5 朝倉治彦監修『新発田藩溝口家書目集成』第一巻、ゆまに書房、二〇一三年
- 6 浅倉有子・岩本篤志・原直史編『新発田藩道具蔵帳集成 二〇一二―二〇一四年度科学研究費補助金基盤研究(〇)「藩地域アーカイブズの基礎的研究―新発田藩を中心として―」報告書』新潟大学人文学部原直史研究室、二〇一三年
- 7 高橋義雄『大正名器鑑』、大正名器鑑編纂所、一九二二年
- 8 『大正名器鑑』に所載の溝口家旧蔵の茶入と茶碗は以下である。瀬戸茶入「溝口胴高」(第三編、一五一―一五三頁)、薩摩甫十茶入「玉水」(第五編下、四七―四九頁)、古瀬戸茶入「蛭」(第三編、二二七―二二九頁)、古瀬戸茶入「徳永肩衝」(第三編、二七―二九

- 頁)、丹波焼茶入「紅葉」(第五編下、一〇一〜一〇二頁)、織部沓茶碗古(第八編、一八七頁)、宗節伯庵茶碗(第八編、一七五〜一七六頁)
- 9 前掲註(3)。一六五〜一六六頁
- 10 両角かほる「翻刻『御茶会記』(下)」「泉屋博古館紀要」、二〇〇三年
- 11 「小堀遠州藏帳元帳」「茶道古典全集」第一二巻、淡交社、一九六七年、一八七〜一八八頁
- 12 『遠州の観た茶入』(五島美術館、一九九六年、二〇六頁)において、「名物記にみる和物茶入の変遷」を参照。
- 13 筆者熟覧。
- 14 『新発田市史』上巻(新発田市、一九八〇年、三四〇頁)に以下のような記述がある。

高久助之進時安
(中略)

時安は溝口内匠重時の三男で高久家に養子に入った。この縁で時安の代になり家禄は急増し、正徳四年八月六五〇石を知行して御仕置役に任命され、翌年四月組頭になり将監と改めた。
- 15 添状では信州様とあるが、四代藩主重雄をさす。「悠廟紀」(『新発田藩史料』第一巻、二二頁)には以下の記述がある。

御任官ありて信濃守様と称し奉る。
- 16 宮武慶之「閑極法雲・東澗道洵両筆墨蹟について」「アート・リサーチ」第一四号、アート・リサーチ・センター、八九〜一〇四頁、二〇一四年
- 17 この茶碗を収納する箱には江戸町奉行を長く勤め、茶人でもあった神尾備前守元勝とする墨書により「翠浪」とある。
- 18 高橋義雄『近世道具移動史』(慶文堂書店刊、一九二九年、一四八〜一四九頁)には次のような記述がある。

明治三十七年六七月頃かと覚ゆ、溝口伯家にては江東中村楼に於て其蔵器を入札売却に附せられた

高橋義雄による他の記述では『大正名器鑑』第三編(審美書院、大正十一年、二二八〜二二九頁)があり、蛭茶入について次のような記述がある。

(中略) 時恰も日露戦争遼陽戦前にして、世人争うて軍資充実を謀り、日本銀行に金時計を預け入る者さへありし折柄なれば、数寄者も茶器を顧みる暇なく、蛭も為めに其光を失ひて、僅々千余円にて馬越化生翁に落札したるは誠に悲惨なる事共なりき。
- 19 都守淳夫『売立目録の全国所在と書誌情報』(勉誠出版、二〇〇一年)では、溝口家の入札目録は確認できない。
- 20 『大正名器鑑』(第五編下、審美書院、一九二二年、一〇一頁)において、丹波焼茶入銘「紅葉」の解説では以下のような記述がある。

(中略)

而して明治四十三年他の茶器数十点と併せて同家より直接箒庵に譲渡さる。
- 21 売立目録『東都寸松庵主所蔵品』、一九二二年、請求記号美研一〇一六二、東京文化財研究所蔵
- 22 売立目録『高橋家御蔵品入札』、一九一八年、請求記号美研一〇五〇九、東京文化財研究所蔵

- 23 売立目録『説田家蔵品展観目録』、一九三二年、請求記号美研・1470、東京文化財研究所蔵
- 24 売立目録『特別展観目録』、一九三九年、雲中庵文庫蔵
- 25 『茶杓図譜』、東京大学史料編纂所蔵、請求記号溝口家史料・溝口家史料・177
- 26 『二月茶杓』、東京大学史料編纂所蔵、請求記号溝口家史料・溝口家史料・178
- 27 蔵帳では「宗甫茶杓」とのみあるのは四件の所載が確認される。その内一件は小堀宗中の箱書であるため、ここではそれを除いた三件のいずれかに合致するとした。
- 28 野村瑞典『翠濤侯遺芳集』一九八八年、岡吸仙堂、一〇〇～一〇一頁
- 29 『大名茶人松平不昧展』(二〇〇一年、一六八頁)には松平不昧作共筒茶杓「陶靖節」(二畑寺)が所載される。
- 30 『草人木書苑』(茶道美術茶入)、一九八一年、淡交社、一八九頁前掲註(2)
- 31 熊倉功夫、原田茂弘校註『東都茶会記(近代茶会史料集成(二))』(淡交社、二〇〇〇年)四一〇～四一一頁
- 33 溝口直諒自筆本『名物重宝説』、東京大学史料編纂所蔵、請求記号、溝口家史料・40
- 34 小堀遠州作茶杓にも同銘があることから、倣ったものと考えられる。
- 35 筆者熟覧。
- 36 たとえば茶道具のうち、香合や灰匙などの記述はないものの売立目録中には同家伝来とする道具の図版が所載される。これらの道具については今後、補遺として検討する。
- 37 読売新聞 大正十二年五月三十日
入札たより 吉川氏遺品と溝口子爵の売立結果の項
読売新聞 明治二十二年五月二十三日
宮廷録事 溝口子爵の項

資料紹介

翻刻『新発田御道具帳』

〈凡例〉

- 一、新発田市立図書館所蔵の『新発田御道具帳』の翻刻である。
- 一、翻刻に際しては原則として原文のままとした。
- 一、明らかな誤記については横にカッコ書きを付した。
- 一、本文中で画像紹介できた作品には（※）印を付した。

〔翻刻〕

新発田

御道具帳

- 一 御茶碗 一 御茶入
- 一 御茶杓 一 棗
- 一 茶巾盥 一 御水指
- 一 建 水 一 御 釜
- 一 御炭斗 一 水 次
- 一 灰 器 一 御茶箱

御茶碗之部

乾坤入

- 一 井戸出茶碗

御蟲履入

- 一 井戸茶碗

御蟲履入

- 一 井戸時代茶碗

御蟲履入

- 一 井戸脇茶碗

元銘後吹炭宗中鑑定改名

御蟲履入

- 一 井戸平茶碗銘木枯

箱書朽木公

御秘蔵

- 一 井戸脇平茶碗

御蟲履入

- 一 高麗雨漏茶碗

- 一 高麗鉢手茶碗銘白妙

箱書宗中

- 一 高麗古手屋形茶碗

- 一 高麗新茶碗

- 一 高麗刷毛目茶碗

箱書神尾備前守

乾坤入

- 一 権左衛門五器茶碗（呉）

- 一 高麗五器茶碗銘時雨

追二通
箱書松平備前守

- 一 高麗堅手茶碗

薄茶

見廟御筆御添書

- 一 半寸高麗茶碗（半紙）

箱書石州公

- 一 高麗小高臺茶碗

薄茶

- 一 高麗茶碗

御秘蔵

- 一 繪高麗茶碗

薄茶

御蟲履入

一 高麗裸茶碗

箱書蓬雪

一 高麗裸茶碗

一 高麗堅手茶碗

薄茶

一 飛々や茶碗

箱書初代神尾備前守

御秘蔵

一 堅手飛々や茶碗

箱書宗本

薄茶

見明院様御道具

一 雨漏手茶碗

銘
内石州公
外頼宗中
いれ石

一 高麗御本茶碗

一 既望茶碗

薄茶

一 刷毛目平茶碗

一 柳本茶碗

御秘蔵

一 ぞは茶碗

銘
武蔵野
(蕎麦)

(※)

御蟲履入

一 めかた茶碗

御蟲履入

一 黄ぞは茶碗

銘
残雪

箱書神尾備前守

一 後熊川古高麗端反茶碗

一 末熊川茶碗

御蟲履入

一 鬼熊川茶碗

箱書宗中

一 熊川茶碗

見廟御秘蔵

一 粉吹雨漏手茶碗

銘
一文字

一 あま雲茶碗

一 大坂茶碗

箱書不昧公

一 三嶋礼賓平茶碗

薄茶

御蟲履入

一 三嶋茶碗

箱書蓬雪

ろ五ばん

一 三嶋茶碗

一 三嶋茶碗

一 以ら保團扇形茶碗

一 黄以ら保茶碗

一 黄以ら保茶碗

一 斗々屋茶碗

銘
花紅葉

一 斗々屋茶碗

銘
村紅葉

箱書松平備前守

一 斗々屋茶碗

見明院様御道具

一 斗々屋茶碗

御蟲履入

一 斗々屋小服茶碗

薄茶

六十四ばん

一 朝鮮刷毛目茶碗

薄茶

一 朝鮮三嶋茶碗

薄茶

一 繪織部筒茶碗

八十三ばん

一 織部筒茶碗

一 古薩摩春草花模様茶碗

九三ばん

一 古薩摩ノ繩松竹梅模様筒茶碗

一 黒織部沓茶碗

八十七ばん

御蟲履入

一 九谷茶碗

薄茶

一 織部沓茶碗

箱書御宛名

(※)

八十五ばん

一 安南茶碗

一 九谷茶碗

薄茶

一 饒州茶碗

箱書宗中 義経公御上之由
文久元亥四月五十嵐氏品の上ル

七十五ばん

三十五ばん

一 九谷筒茶碗

薄茶

一 呉洲赤繪茶碗

一 五郎七平茶碗

薄茶

見廟御秘蔵御蟲履入

一 宗人赤楽茶碗銘 いくふ

薄茶

一 染付平茶碗

箱書宗中

御蟲履入

一 染付腰霰茶碗

(※)

一 長次郎黒楽茶碗

見廟御書人付人
挽家書不味公

薄茶

一 祥瑞福寿丸紋茶碗

三十式ばん

一 成化時代染付湯呑

一 大心手造茶碗

早春御用

薄茶

御秘蔵四十五ばん

一 成化染付沓茶碗

一 庸軒手造黒楽茶碗

薄茶

一 染付平茶碗

一 江雪手造黒楽茶碗

箱書江雪

薄茶

一 染付金欄手茶碗

一 玉室手造赤楽茶碗

薄茶

一 古薩摩忝竹梅模様茶碗

一 宗人赤楽茶碗

薄茶

一 古薩摩秋草模様茶碗

御秘蔵

一 古薩摩金欄手筒茶碗

一 清巖手造茶碗

薄茶

一 古薩摩片身替茶碗

る四ばん

一 一入黒楽茶碗

薄茶

(※)

四十一ばん

一 疎安手造茶碗

薄茶

一 黒楽菊模様茶碗

薄茶

御墨入珍器御秘藏

一 石州手造赤楽茶碗

片桐貞昌手造在判
箱書松平周防守康福

薄茶

御秘藏

一 尹部茶碗

一 膳所焼茶碗

一 志とろ茶碗

一 志野筒茶碗みねの
奈風

七十六ばん

一 信楽茶碗

一 信楽土空中茶碗

一 高取茶碗銘
一字

一 元高取茶碗

見明院様御道具

一 黄瀬戸平茶碗銘
苔水

箱書不昧公

一 黄瀬戸茶碗

薄茶

一 乾山菊模様茶碗

る式ばん

一 仁清竹繪茶碗

御秘藏

一 仁清枯木繪茶碗

箱書宗和

在ばん

一 古萩茶碗

見廟院御秘藏二ばん

一 古萩茶碗

一 萩割高臺小服茶碗

薄茶

一 古萩茶碗号
達磨

一 市阿弥茶碗

乾坤入

一 浅草茶碗

乾坤入

一 織田茶碗

乾坤入

一 宗節茶碗

一 黄天目茶碗

一 唐物天目茶碗

一 點山天目茶碗

一 繪天目茶碗

一 黄天目茶碗

一 銀臺天目茶碗

一 天目臺

御茶入之部

一 唐物茄子茶入

一 唐物尻膨茶入

(※)

上品

一 唐大海茶入 箱書小堀和泉守政之

上品御蟲入

一 唐肩衝茶入 箱書宗中

一 漢小肩衝茶入 袋一ツ

上品

一 手瓶茶入

上品

一 井戸手塩器茶入 箱書蓬露

一 安南茶入

寶上乾坤入

一 蛭茶入 (※)

寶上乾坤入

一 胴高茶入 (※)

寶上乾坤入

一 大概茶入

但御名物蛭胴高同品名物御座候御分置

被為在り箱之御茶入之處御蓋召て数子入

申候尤宗甫真跡にて生子手の本歌御座候

右宗中鑑定同人真筆之被申俄作之置

寶上乾坤入

一 大瀬戸茶入 宗中極書入

寶上乾坤入

一 凡手茶入 箱書十左衛門政貴 袋四ツ

寶上乾坤入

一 丸壺茶入

上品

一 春慶欄座茶入 箱書蓬雪 替袋一ツ

一 春慶圓座茶入 箱書十左衛門政貴 替袋一ツ

一 春慶内海村雲茶入

一 春慶柳茶入

一 春慶平茶入 御稽古物

御蟲入

一 丹波焼茶入銘 紅葉 箱書縣宗知 替袋アリ (※)

上品御蟲入

一 古瀬戸茶入

一 古瀬戸茶入銘 松の戸

上品

一 瀬戸水滴茶入 箱書小堀和泉守政之

上品

一 瀬戸(捻貫)ねしぬき茶入銘 若草 箱書蓬雪

一 瀬戸柳茶入

一 瀬戸茶入

一 瀬戸口廣茶入

一 瀬戸寸切茶入

上品

一 ■葉茶入 箱書初代神尾備前守

本形アリ
替袋アリ (※)

上品見廟御書付三枚入

一 口廣茶入

箱書加賀屋宗之

替袋一ツ

上品

一 藤四郎大海茶入

箱書宗中

一 音羽手茶入

替袋一ツ

一 弓削屋茶入

箱書松花堂

替袋一ツ

上品御蟲履入

一 市場手茶入

見廟御書付入
箱書 蓬雪

替袋一ツ

上品

一 茗屋茶入

箱書哥銘とも
神尾備前守

一 半切茶入

一 秋の山茶入

一 一文字大海茶入

一 忍手茶入

箱書十左衛門政貴

替袋二ツ

一 口廣茶入

替袋二ツ

一 渋紙手圓座茶入

一 古の茂茶入

一 ねしぬき茶入

上品

一 萬屋茶入

一 亀甲茶入

箱書宗中

一 初雁茶入

本形アリ
替袋アリ

一 振鼓坊主手茶入

一 津川茶入

面とりの面とり似

一 米市茶入

一 葵手茶入

一 利休茶入銘
関服

箱書宗関

替袋二ツ

三ばん

一 利休茶入

一 利休茶入

箱書金葉宗和
裏書土岐二三翁

上品

一 藤四郎櫺座茶入

一 博多茶入

箱書神尾備前守

箱書鎮信

替小紋切

(※)

一	田原茶入 <small>銘 明石</small>	一	松屋肩衝写	
一	備前片身替茶入			
一	備前茶入		御水指之部	
	三十五ばん		御晶貞入	
一	備前茶入		一	南蛮縄簾水指
一	緋襷茶入 <small>銘 澤水</small>	箱書宗信		御秘藏
	上品		一	南蛮水器 <small>銘 白水</small>
一	柴の戸茶入	挽家哥銘共宗甫		箱書宗中
一	古高取茶入	替袋二ツ	一	南蛮古簾水指
一	信楽肩衝茶入			御秘藏二十ばん
一	志登路飯銅茶入	箱書小堀遠江守政房	一	南蛮海老手水指
一	唐津茶入		一	南蛮太鼓形水指
一	嶋壺鮫鯨茶入		一	南蛮砂張水指
一	織部丸壺茶入		一	南蛮物水指
一	膳所口廣茶入	箱書篷雪	一	跣趾平水指
	五ばん		一	安南珎器水指
一	膳所焼茶入		一	砂張水指
一	膳所焼茶入		一	嶋物平水指
	二十六ばん		一	紅毛染付水指
一	仁清水滴茶入		一	紅毛白焼水指
一	九谷茶入		一	南京紋染付水指
一	呂宗子鶴茶入	箱書宗中	一	南京青磁水指
一	戸山茶入	外箱竹腰公 内箱尾州公	一	青磁手桶水指
一	蛭茶入木形		一	成化染付手桶水指
			一	成化染付植木鉢水指

一 染付唐草模様水指

一 染付壺形棚水指

御蟲履入

一 朝鮮菱形水器

箱書宗中

一 朝鮮耳付水指

一 朝鮮筒水指

一 朝鮮端反水指

一 朝鮮片口鉢

水指兼用

一 新朝鮮耳付水指

一 御本水指

一 御本水指

御蟲履入

一 古瀬戸水指

御秘蔵二十式ばん

一 渋紙手水指

一 瀬戸一重口水指

一 瀬戸耳付水指

一 瀬戸水指

一 瀬戸坊主手水指

一 中瀬戸水指

一 破風竈水指

一 古備前水指銘
三夕

一 古備前壺水指

式十九ばん

一 青備前水指

一 備前黒手水指

一 備前水指

一 備前籠手水指

御秘蔵

一 尹部井筒水指

箱書久須美疎安

御秘蔵三十ばん

一 尹部模木はた水指

一 尹部水指

一 高取筒水指

箱書小猿道閑

一 高取帽子水指

一 高取単瓢水指

御秘蔵四十ばん

一 信楽半胴水指

紹鷗時代

御秘蔵式十七ばん

一 信楽一重口水指

一 古信楽水指

一 信楽裸焼水指

十六ばん

一 信楽水指

一 信楽細口水指

御秘蔵二十八ばん

一 古伊賀水指

一 伊賀細口水指

一 伊賀瓢單水指

一 伊賀いちし蓋水指

一 志登路水指

七三ばん

一 丹波菱耳水指

遠州切形

四十ばん

一 唐津水指

一 古萩水指

一 萩手付水指

十八ばん

一 薩摩瓢形水指

替蓋付

三十ばん

一 九谷水指

三十九ばん

一 九谷水指

久田宗伯造
箱書清水釣玄

一 尾土焼釣瓶水指

一 乾山瀧繪水指

一 仁清焼輪耳水指

一 一入黒水指

一 高原鳶口水指

一 古銅経筒水指

一 経筒水指

一 木地釣瓶塗蓋水指

塗師八郎兵衛造

一 赤杉木地水指

紹嶋好留塗
桶水指之形

一 赤杉木地水指

一 余參造新手桶水指

一 木釣瓶水指

一 桐クリ拔水指

一 遠州好竹水指

御棗之部

見廟御箱書

一 時代菊蒔繪棗

袋唐物とんす

一 時代黒棗

一 時代菊桐蒔繪棗

替袋二ツ

一 時代松竹梅蒔繪棗

一 時代黒中棗

六十三ばん

一 時代菊蒔繪棗

一 時代楓蒔繪棗

一 時代桑棗

一 見廟御筆菊漆繪棗

一 同棗

御蟲履入

一 南方小棗

御蟲屑入

一 余参棗 箱書康任君

見廟御箱書

一 朱棗

見廟御箱書

一 雪月花棗

箱書退庵

一 凡鳥棗

一 黄朱筋棗

一 利休長棗

一 利休棗

一 本阿弥光悦梅棗

一 宗旦好大雪吹棗 宗哲共箱

一 石州形次郎棗 道志共箱

一 石州好朱面取棗

一 石州好之棗 二代目道恵作彫銘アリ

一 石州好菊棗

一 石州形雪吹棗 盛阿弥造

御秘蔵

一 遠州好七宝紋竹茶器 箱書宗中 一 双入

一 遠州形次郎棗写 道恵作大徳寺孤峰庵
什物遠州好之形

一 不昧公好雪吹棗 箱書不昧公

一 菊桐彫竹棗

一 唐草棗

一 能代棗

一 梨子地棗

一 松竹梅平棗

一 彭祖龜棗

一 尻張棗

七十式ばん

一 嵯峨棗

一 極古長棗 金森法印所持

一 唐象牙棗

一 糸目春慶塗棗

一 春慶塗中棗

一 高臺寺利休形雪吹棗

一 金平目菊桐蒔繪面取棗

一 浪貝畫蒔繪面取棗

一 露色地共色桜蒔繪中棗

一 利子地菊桐蒔繪丸棗 (梨)

一 嵯峨秋草蒔繪棗

一 桐蒔繪平棗

一 萩蒔繪平棗 春正作

一 春七草蒔繪棗

一 時代牡丹彫薄茶器

一 時代金林寺蒔繪薄茶器

一 金林寺盛阿弥薄茶器

一 金林寺外木地薄茶器

一 太閤時代梨子地菊蒔繪白粉解

一 青磁双魚薄茶器

一 青磁酒會薄茶器

御秘蔵五十一ばん

一 青磁菊浮紋薄茶入

御蟲肩入

一 祥瑞福寿紋薄茶入

(※)

一 老松割蓋茶入

一 石州形面薄茶器

一 石州公寸切茶桶

一 薩摩焼薄茶器

一 薩摩茶入

一 織部耳薄茶入

一 織部手桶薄茶器

一 飛騨菊桐蒔繪薄茶入

一 秋海棠蒔繪薄茶器

一 青貝亀甲薄茶器

一 青貝六角薄茶器

一 青貝石畳薄茶器

一 春慶塗雪吹薄茶器

一 秋草薄茶器

一 象牙手桶薄茶器

箱四碎君

見廟御箱書

一 染付薄茶器

一 金馬薄茶器

一 茶通薄茶器

一 竹薄茶器

一 木彫茄子薄茶器

七十ばん

一 蔦薄茶器

替蓋アリ

一 籃組朱塗薄茶入

十五ばん

一 南蛮薄茶器

一 時代秋草蒔繪中次

一 檜蒔繪中次

一 桜蒔繪中次

一 松竹梅蒔繪中次

一 獨楽中次

箱書宗實

一 青貝中次

一 宗和流中次

一 古吉野中次

一 古作竹中次

一 古織部好中次

一 杉木地中次

一 藤重中次

一 黒根来中次

松虫蒔繪

一 遠州八角中次銘 菊花

一 片身梨子地中次

六十五ばん

一 桑中次

一 薩摩焼金欄手中次

見廟御好

一 不識錦楓中次

海晏寺園中二北條氏
植えれしにて出来

御茶杓之部

御蟲履入

一 見廟御作御茶杓

直溥公御箱書

二筒壹箱……………(※)

乾坤入

一 利休作茶杓

(※)

乾坤入

一 利休直茶杓

外箱見廟御筆

(※)

乾坤入

一 宗甫茶杓

乾坤入

一 宗甫作茶杓銘
一ツ松

箱書宗甫

(※)

御蟲履入

一 宗甫茶杓

箱書宗中

御蟲履入

一 宗甫茶杓銘
山の井

筒弧峰子名アリ

(※)

御蟲履入

一 宗甫茶杓

筒卜

御蟲履入

一 宗甫茶杓

筒二宗甫卜名アリ

乾坤入

一 織部殿茶杓

(※)

御蟲履入

一 古織茶杓

御蟲履入

一 佐久間将監實勝茶杓

(※)

御蟲履入

一 徳祐公作茶杓銘
清風

(※)

御蟲履入

一 桑山左近殿茶杓

(※)

御蟲履入

一 細川三斎公作茶杓

箱書了伴

(※)

御蟲履入

一 作州公造茶杓銘
浮雲

(※)

御蟲履入

一 空中齋茶杓銘
遠山

彫銘空中

(※)

一 佐川田喜六茶杓銘
都鳥

(※)

一 野田酔翁茶杓銘
源七

(※)

一 小猿動閑茶杓銘
女郎花

(※)

一 一尾伊織作茶杓銘
龜首

(※)

一 鷹司輔信公茶杓銘
都さ巳

(※)

一 近衛應山公茶杓銘
埋火

(※)

一 六々山人象牙茶杓銘 丈山……………(※)

一 道竿茶杓

乾坤入

一 石州消息掛物添茶杓 外箱 見廟御筆

御蟲貞入

一 石州公作節下り茶杓 野田酔翁手紙狂哥入

一 石州公作茶杓 竿直庵

一 片桐新之丞作茶杓銘 春霞……………(※)

一 不昧公茶杓銘 陶靖節……………(※)

一 大徳寺天室和尚茶杓共筒……………(※)

一 怡溪和尚作茶杓 箱書木下清兵衛伊豫守

一 清巖和尚作茶杓……………(※)

一 江雪和尚茶杓……………(※)

御蟲貞入

一 龍安寺傳首茶杓……………(※)

一 信海茶杓共筒……………(※) 極札一枚

一 江月和尚茶杓銘 櫛……………(※)

一 蓋師左近作茶杓銘 鶯宿梅……………(※)

一 半々庵茶杓銘 埋火……………(※)

一 半々庵茶杓

一 宗中作茶杓銘 雛鶴……………(※)

一 宗中作茶杓銘 みつかき……………(※)

御蟲貞入

一 小堀三作十二ヶ月茶杓 箱書宗本蓬露……………(※)

御蟲貞入

一 蓬雪作茶杓銘 山の端……………(※)

一 半求庵茶杓銘 秀……………(※)

一 半求庵茶杓銘 腰みの……………(※)

御水次之部

一 唐物水次

一 南蛮水次

一 南蛮薬罐

一 朝鮮水次

一 砂張水次

一 時代薬罐水次

一 時代大内薬罐

一 大内菊唐草薬罐

一 大内衾地紋水次

一 非垣薬罐水次

一 織部焼水次

一 宗和一筋砂張水次

一 腰黒薬罐水次

御茶巾盥之部

一 七官青磁茶巾盥

一 南京染付桶鉢茶巾盥

一 染付大鼓胴茶巾盥

一 砂張茶巾盥

一 砂張茶巾盥

二ツ一箱

御炭斗之部

一 唐物丸菜籠

一 唐物竹炭斗 四足

一 唐物炭斗

式十六ばん

一 唐物籠角炭斗

箱書茶屋宗古

一 唐物平丸菜籠

一 唐物手付籠炭斗

一 唐物平炭斗

一 唐物四角菜籠

一 唐組良んかん炭斗

一 唐籠組炭斗

式十ばん

一 時代竹組籠炭斗

一 時代手付籠炭斗

十三ばん

一 ト組炭籠

御秘蔵

一 あしら組炭斗

箱書茶屋宗古

一 藤組炭斗

一 組物丸菜籠

一 竹組手付炭斗

一 組物炭籠

一 宗栢組底板手付炭籠

一 茸簾葉入二重組炭斗

一 二重籠炭斗

石州好

一 古芋籠炭斗

一 芋籠炭斗

一 芋籠炭斗

待合兼用

一 椀籠炭斗

一 八丈糸籠炭斗

一 駿河物炭籠

見廟御書付入

一 大崎瓢炭斗

一 瓢炭斗

箱書松平周防守録
并御添書極書共二通

見廟御書付 二十八ばん

一 瓢炭斗

一 瓢炭斗

一 瓢炭斗

一 □ふから炭斗
(とか)

一 古京作平籠炭斗

一 杉木地切子形炭斗

遠州公御好形

六十九ばん

一 寄木人形臺炭斗

如儼作

朝鮮灰器炭斗兼用

竹皮炭斗

建水之部

灰器之部

南蛮内洪灰器

南蛮縄簾灰器

南蛮灰器

古渡朝鮮灰器

備前灰器

樂灰器

緋襷灰器

唐津灰器

二ツ一箱入

九ばん

古伊賀灰器

信樂灰器

空中灰器

元赤樂灰器

遠州公時代柳川焼灰器

柳川焼灰器

土州尾土焼灰器

湊焼灰器

雲華焼灰器

吉左衛門焼灰器

古薩摩山水建水灰器兼用

南蛮海老手建水

朝鮮浪手建水

一ばん

朝鮮建水

朝鮮建水

はんね羅建水

モフル建水

古唐津塩器建水

繪唐津翻

合子建水 象眼入

砂張こほし

砂張建水

砂張翻

御蟲履入

瀬戸建水

瀬戸壺形翻

瀬戸翻

黒瀬戸建水

見廟御秘蔵

藤四郎建水

一ばん

備前翻

箱書宗中

香の鉢兼用

見廟御箱書

(※)

一 備前こほし

一 備前翻

御秘蔵 御蟲眞入

一 染付建水

見廟御秘蔵

一 緋襷こほし

十ばん

一 緋襷翻

見廟御秘蔵

一 尹部榎木肌建水

十八ばん

一 信楽建水

一 古伊賀建水

一 織部黒建水

十六ばん

一 古薩摩山水建水

一 九谷建水

一 雲州ノ切写建水

一 棒先写五郎三郎作建水

一 古銅地紋建水

一 黃唐銅建水

御常用

御釜之部

乾坤入

一 太閤〆拝領桐之御釜

一 初代寒雉廣口釜

箱書寒雉

底添淨雪
極書入

一 初代寒雉丸釜

上品御秘蔵

一 阿弥陀堂天猫釜

箱書底添

一 天猫丸釜

一 福祿寿天猫釜

上品御秘蔵

一 芦屋菱釜

蓋つまみ菊打枝
環付てふ

一 古芦屋鶴首糸目釜

一 芦屋車軸釜

上品御秘蔵

一 中阿弥陀堂釜

与次郎作

上品御秘蔵

一 輿次郎丸釜

一 栗口霰釜

与次郎作蓋とも
添置

一 古浄味荒磯目釜

一 霰責紐釜

一 九兵衛ふとん釜

一 御物瓢単釜

一 大西浄清釜

一 算木釜

一 新車軸釜

一 糸目乳口釜

一のきたれ釜

御鼠貞入

一の菊蒔繪御茶箱

包上さらさ裏浅黄

大蓋之部

一 天猫廣口釜

茶碗

紫二十打鉤付

一 水口釜

棗

古染付季白湯呑見立袋表裏和入田おり留結つくりとも
桜之本糸目木地瓢たん蒔繪袋うらとんす紋浅黄結つくり共白茶

御風炉用之部

一 寒雉鶴首釜

自在兼用

茶筌筒

つけの木口蒔繪
銀宗与彫紫網袋入

一 古天猫肩衝釜

同

菓子入

堆朱袋とんす裏小はせ

一 遠州形釜

御風炉兼用

香線入

御本唐糸紅網袋入

一 桜之釜

同

服紗

紫

一 雲龍釜

自在兼用

一 青貝扇蒔繪御茶箱

一 丸形茄子耳風炉釜

同

茶碗

祥瑞ひせんちりめん袋入
(備前)

一 梅松地紋芦屋自在釜

同

棗

信夫蒔繪袋入

一 釣鐘釜

同

茶杓

象牙芋赤地金さらさ袋入

一 六角釜

同

茶筌立

銀

一 車軸釜

同

茶巾筒

禁味写
泰谷竹梅染付祥瑞等 袋入

一 一口四方釜

同

重香合

堆朱茶色網袋入

一 立鼓釜

同

三ツ羽

野鴈

一 糸目釜

合口

曲

赤杉晴川院画内黒塗

一 藤兵衛作切合釜

朝せん風炉二用元ら

服紗

紫

一 御平用合口釜

一 扇蒔繪御茶箱

茶杓

御茶箱之部

茶筌筒

桑

茶巾筒

菱形カキ合

包服紗綿入

紫

一 水仙蒔繪御茶箱

茶碗 二ツ

冠手・染付袋入
堅手

棗

糸目青貝菊蒔繪

茶筥

茶杓

象牙袋入

茶巾筒

鉄菊桐象眼紅網袋入

香線入

白高麗紫網袋入

服紗

紫

一 見明院様御道具
(葡) 蒲萄蒔繪御茶箱

茶碗

乾山菊の繪

茶入

丹波

薄茶器

桐蒔繪

茶杓

象牙

茶筥筒

銀桜皮花透網袋入

茶巾筒

花桶形七宝たら内銀紫網袋入

菓子入

紫檀内梨子地菊すゝき繪

香線入

染付菊瓢単形紅網袋入

見廟御箱書

一 桑御茶箱

茶碗 二ツ

本手半寸
唐津 袋稻妻とんす

棗

宗仙好黒塗腰筋御物袋白茶

茶杓

竹芋

茶筥

茶筥筒

木地菊の繪玄賞斎筆

茶巾筒

木地まけ

ふり出し

黄南京紅網袋入

一 桑瓢蒔繪御茶箱

見廟御添書

茶杓

棗

鉄刀木丸龍蒔繪

茶筥筒

遠州透桑次郎作

茶巾筒

九谷染付網代組

見廟御添書

袋

藍組御茶箱入とも仮入

一 黒葛蒔繪御茶箱

菓子入

菊蒔繪茶箱菓子入

一 禁摩御茶箱

茶碗

乾山龜模様
袋裏稻妻とんす

棗

菊蒔繪平春正作

茶杓

象牙

茶筥筒

鍔竹

茶巾筒

白高麗藤色網袋

菓子器

唐物青貝

一 禁摩御茶箱

仕込無シ

一 禁摩御茶箱

仕込無シ袋嶋裏とんす

一 花月御茶箱

蓋裏周信筆

茶碗

御本曆手紫網袋入

薄茶入

青磁遠州茶御物袋入

茶杓

四分一袋入

見廟
御好にて出来

茶筌筒

ウ流美塗

茶巾筒

竹組

菓子器

菱蒔繪続柄見立もの

一 重菊御茶箱

茶碗

空中紅毛木綿袋入

棗

時代組物袋入

茶杓

茶袋象牙唐子

茶筌

茶筌筒

萩菊桐蒔繪

茶巾筒

桑秋草蒔繪三ヶ月形張抜

ふり出し

菊瓢たん

服紗

一 竹彫物御茶箱

茶碗

古萩古切袋

茶入

唐物丸壺

棗

菊竹蒔繪

茶杓

象牙

茶筌筒

銀桜波紫網袋

茶巾筒

宗鶴造紫網袋

香線入

織部表さらさ唐浅黄

小三ツ羽

野鷹

御蟲屑入

一 秋野蒔繪御茶箱

茶碗

染付祥瑞在銘袋表嶋ひろくと裏縮表とんす統つくり共に印茶

茶入

高取遠州時代袋唐物飾裏唐物浅黄統つくり共茶色

中次

三商好糸目袋表浅黄地小牡丹金らん裡唐海黄紐つくり共白茶色

茶杓

一角袋両面吉左衛門とんす

茶筌筒

桜皮銀紫網袋入

茶巾筒

染付紫網袋遠州之網(火標)

ふり出し

ひたすき紅網袋入

香線入

白呉洲紀州茶網袋入

羽簪

野鷹

服紗

紫

右御茶箱は銀浜式百五拾四まで蓋表三十六裏四十六
掛子内十九外二十七下箱外廻り式百式十六内青紙包

一 桜御茶箱

茶碗

祥瑞遠州茶網袋入(間道)

棗

桜蒔繪かん唐袋入

茶杓

象牙

茶筌筒

桜皮

茶筌

茶巾筒

銀桜皮

菓子入

時代竹袋入

ふり出し

南蛮紫網袋入

香線入

南青瓢たん紅網入

服紗

紫

建
廣

一 三不点御茶箱

茶碗

外箱書宗中

薄茶器

朝鮮刷毛目一ツ黒楽一ツ
蒟醬象牙蓋

茶入

瓢形

茶杓

竹

茶筥筒

錆竹内黒塗江月極書入

茶巾筒

象牙七宝透し

菓子入

蓋裡巖浪蒔繪羊遊斎造

ふり出し

青磁瓶子形紅網袋入

香線入

染付鉄せん模様茶網袋入

服紗

紫二ツ

一 空中茶箱

茶碗

鷹峯の土ニテ空中在銘

茶杓

時代竹

茶筥筒

藤組

茶巾筒

菱七宝透

菓子入 二ツ

桐木地銀箔切古網割蓋

一 楓御茶箱

茶碗

二ツ共隅田川焼

中次

楓

茶杓

銘萬歳楽宗本

茶筥筒

楓仕込ニテ

茶巾筒

楓の木楓透し

ふり出し

隅田川焼

香線入

清竹

三ツ羽

山ぼと

き服紗

さん

染服紗

宗中哥

一 ト組御茶箱

茶碗

朝せん三嶋
染付内五人物

棗

道恵作黒塗茶器形

茶杓

象牙芋

茶筥

茶筥包

表茶■裡竹の皮

茶巾筒

赤銅銀筋紫網袋入
(ボ)

菓子入

砂張ヤンホ
蓋茶筥二用
身建水二用

服紗

紫

見明院様御分

一 ト組御茶箱

茶碗

染付筒一ツ
赤楽一ツ

棗

菊唐草蒔繪

茶杓

竹

茶筥筒

染付一ツ
同新造一ツ

茶巾筒

もふる網梅彫

菓子入

地金水仙共蒔繪

服紗

紫

一 組物御茶箱

茶巾筒

一 桑籠目御茶箱

幸阿弥作

一 飛騨御茶箱

内箱黒枿

一 御茶胴乱

茶碗

茶入

茶杓

象牙継

根付 内 茶筥入茶巾筒
仕込ニ相成居

玉

染付

一 御茶胴乱

茶碗

三嶋

茶筥

茶巾包

内割茶セン茶巾

菓子器

金粉蒔蒔繪

根付

瓢たん形

玉

唐物

(『新発田御道具帳』終)